国際教養大学
アジア地域研究連携機構研究紀要

第 12 号

2021 年 3 月

国 際 教 養 大 学

国 際 教 養 大 学
アジア地域研究連携機構研究紀要

第 12 号　　2021 年 3 月

目　　次

論文

秋田のクルーズ観光：秋田港の訪日クルーズ客の調査
……村山めい子・相沢　陽子・根岸　洋 …… 1

秋田蘭画：眼鏡絵と風景図 ……阿　部　邦　子 …… 35

中嶋嶺雄の日本外務省批判 ……名　越　健　郎 …… 53

研究ノート

秋田竿燈まつりへの外国人の参加
……根岸　洋・熊谷　星・北畑有紀乃 …… 63

著者略歴

Journal of the Institute for Asian Studies and Regional Collaboration
Akita International University

Volume 12 March 2021

Table of Contents

Articles

Cruise Tourism in Akita, Japan: Results of a Research Survey
……MURAYAMA Meiko, AIZAWA Yoko and NEGISHI Yo …… 1

Akita Ranga: Megane-e and Landscape Paintings ……ABE Kuniko …… 35

Criticism of Japanese Foreign Ministry by Mineo Nakajima
……NAGOSHI Kenro …… 53

Research Note

Foreign Participants in the Akita Kanto Festival
……NEGISHI Yo, KUMAGAI Akari and KITABATAKE Yukino …… 63

Author Affiliation

国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要第12号 pp. 1-34（2021）

秋田のクルーズ観光：秋田港の訪日クルーズ客の調査

村　山　めい子・相　沢　陽　子・根　岸　　洋

要旨

前稿（村山 2020）に引き続き、秋田県におけるクルーズ観光の持続的な発展に向け、本稿では訪日クルーズ客及び秋田市内の観光関連事業者からの調査結果を記す。2019年夏に秋田港を訪れた外国籍クルーズ船の乗客・乗員に満足度、県内消費額、秋田県内での行動等のアンケート調査を行い、さらにクルーズシーズンの終了した同年冬に、秋田市内の主たる観光事業者からクルーズ客の消費行動等についての聞き取り調査を実施した。訪日クルーズ客の秋田での満足度は非常に高いが、多くの課題やチャンスも明らかになった。インターネット上の英語の観光情報の拡充、秋田市内の標識、飲食店のメニュー、文化施設や商品説明の英語表記、喫茶店等の休憩施設、Wi-Fiのアクセス拡充などが求められている。その一方で、訪日クルーズ客がもたらす経済効果は比較的低く、クルーズ船の係留時間の延長、外国人向けの新商品、秋田の伝統工芸などの「体験」商品の開発など、受入れ側のリスクを抑えながらも、訪日クルーズ客の経済活動を促進する方策が望まれる。

キーワード：秋田の訪日クルーズ観光、クルーズ客の満足度と消費活動、秋田竿燈まつり、秋田港クルーズ列車、ダイヤモンド・プリンセス、アザマラ・クエスト

Cruise Tourism in Akita, Japan: Results of a Research Survey

MURAYAMA Meiko, AIZAWA Yoko and NEGISHI Yo

Abstract

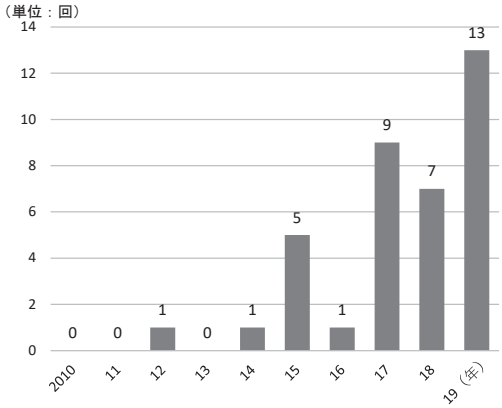
Following the research paper covering cruise tourism development in Akita in the previous issue of this journal (Murayama, 2020), this paper focuses on the results of a survey conducted with inbound cruise tourists in the Akita Prefecture and interviews with tourism businesses in Akita city, as well as providing recommendations. The study on sustainable cruise tourism in Akita included a cruise visitor survey that was aimed toward inbound tourists, passengers, and crews, and was conducted in the summer 2019 in Akita City. This survey covered activities, satisfaction levels, and spending patterns of cruise tourists in the prefecture. After the cruise season finished (winter), tourism businesses were interviewed to assess cruise tourists' behavior. While the satisfaction level of cruise visitors was very high overall, many opportunities and challenges were

identified, such as more demand for Akita tourism information online in English and the need for more English signage in the city, English menus and explanations at tourist attractions. Demand for cafés and free Wi-Fi access in tourist attractions (e.g., museums) was also highlighted. It was found that the economic impact of cruise visitors in Akita was relatively low. To increase the economic benefits for the local businesses and the community, a variety of approaches are suggested, such as longer stops at Akita and new product development, including an enhanced promotion of the "experience" of the traditional culture of Akita.

Keywords:, Japan, Akita, cruise tourism, inbound tourism, economic development, Kanto festival, Akita cruise train, Diamond Princess, Azamara Quest

1．はじめに

前稿(村山2020)では、秋田のクルーズ観光の持続的発展への提言を述べたが、今号では、2019年夏に秋田市内で実施した訪日クルーズ客と、クルーズシーズンの終了した冬に秋田市内の観光関連事業者からの調査結果をまとめる。クルーズ人口が増加する中、秋田県は、小樽港や境港など日本海側の港湾が連携する「環日本海クルーズ推進協議会」への加入、官民が連携する「あきたクルーズ振興協議会」の設立などを通し、クルーズ船の誘致活動に取り組んできた。また、秋田港では、大型船受け入れのため港湾を整備したほか、専用ターミナルの供用を開始し、受け入れ態勢の拡充を図った。これらの取組みが奏功し、秋田県のクルーズ船の寄港回数は新型コロナウイルスが世界で感染拡大する以前の2019年までは増加傾向にあった(図1参照)。寄港数の増加にともない、県内では、地域への経済波及効果への期待とともに、インバウンド需要の獲得方法を模索している状況にある。そこで、国際教養大学アジア地域研究連携機構、英国レディング大学、そして秋田経済研究所は、クルーズ船で寄港する外国人旅行者の動向を把握するため、2019年度に共同研究を実施した。



資料：秋田県港湾空港課

図１　秋田港の外国籍クルーズ船の寄港回数

2．乗客・乗員へのアンケート調査結果

2-1．アンケート調査の概要

本調査では、2019年8月に秋田港に寄

港したクルーズ船2隻(6日「ダイヤモンド・プリンセス」、24日「アザマラ・クエスト」)の乗客および乗員を対象に、回答者の属性、秋田市内の訪問先、消費行動、秋田県の印象等を質問した。調査対象船の概要は表１のとおりである。

調査実施状況について、6日は市内で調査員8人が72の標本を回収した。この日は秋田竿燈まつりの最終日で、気温は32度近くまで上昇し(日本気象協会, 2019)、湿度も日中は57％から80％ほどと非常に蒸し暑い日となった(気象庁, 2019a)。また、24日は1人の調査員がクルーズターミナルで42の標本を得た(表2参照)。この日の最高気温は26.5度で比較的過ごしやすい日であった(気象庁, 2019 b)。

このような本格的なクルーズ船への調査は、県内では初めてということもあり、調査可能な期間、場所、調査時間、調査人員等に大きな制限があった。例えば、乗客の消費額や満足度を尋ねる調査は、通常は寄港地での活動が終わった後、乗船する直前にクルーズターミナルで行われるが、6日はクルーズターミナルでの調査が出来ず、秋田駅、秋田港駅、千秋公園などで行った。また、乗客は英語圏以外の人たちも予想されていたが、調査票は英語のみが用意された。調査結果はこれらの点を考慮する必要があり、統計学的見地から標本誤差があることは否めず、継続調査が期待される。

2-2．回答者の属性

a）年代

調査期間が夏休み中ということもあり、65歳以上のグループは44人(39.3％)と半数を割っているが、その一方で、18歳以上49歳以下は35人(31.3％)を占める(表3参照)。

なお、6日は家族と一緒に乗船している未成年の子どもが多かった。また、乗員10人については8人が25～34歳で、35～49歳と65歳以上は夫々1人ずつである。

表１　調査対象船の概要

船　名	入港日時	出港日時	乗客定員	総トン数	船　長	寄　港　地
ダイヤモンド・プリンセス	8月6日(火) 7：00	8月6日(火) 23：00	2,706人	115,906 t	290.00 m	横浜～秋田～青森～境港～釜山～高知～徳島～横浜
アザマラ・クエスト	8月24日(土) 8：00	8月24日(土) 14：00	690人	30,277 t	181.00 m	東京～青森～秋田～金沢～境港～釜山～北九州～広島～高松～神戸～清水～東京

資料：県港湾空港課

表２　回答者の内訳

（単位：人）

船　名	調査実施日	合　計	乗　客	男　性	女　性	無回答	乗　員	男　性	女　性
ダイヤモンド・プリンセス	6日	72	65	39	22	4	7	5	2
アザマラ・クエスト	24日	42	39	17	22	0	3	2	1
		114	104	56	44	4	10	7	3

表3　年代

（単位：人、%）

	実　数	構成比
18～24歳	5	4.5
25～34歳	19	17.0
35～49歳	11	9.8
50～65歳	33	29.5
65歳以上	44	39.3
合　　計	112	100.0

表4　国籍・地域

（単位：人、%）

	実　数	構成比
北・中央アメリカ	55	48.7
オセアニア	28	24.8
アジア	16	14.2
ヨーロッパ	14	12.4
合　　計	113	100.0

表5　居住地

（単位：人、%）

	実　数	構成比
北・中央アメリカ	54	47.8
オセアニア	30	26.5
アジア	15	13.3
ヨーロッパ	14	12.4
合　　計	113	100.0

表6　職業

（単位：人、%）

	実　数	構成比
定年退職者	56	49.1
就業者	33	28.9
専業主婦	7	6.1
失業中	1	0.9
学生	7	6.1
乗員	10	8.8
合　　計	114	100.0

b）国籍・地域、居住地

クルーズ客の国籍・地域の約半数(48.7%)は、アメリカ(38人)、カナダ(16人)、メキシコ(1人)といった北米と中央アメリカだった(表4参照)。次に多いグループはオーストラリア(27人)とニュージーランド(1人)を合わせたオセアニアで、全体の24.8%を占める。そして、中国／香港(10人)、フィリピン(3人)、台湾(2人)、タイ(1人)と、アジアからは全体の14.2%が来ており、最後にイギリス(9人)、アイルランド、ドイツ、オランダ、ベルギー、ロシア(各1人)といったヨーロッパからのグループとなった。このうち、乗員は、フィリピン(3人)、イギリス(2人)、アメリカ、カナダ、メキシコ、オーストラリア、ベルギー(各1人)である。

なお、国籍と居住地が異なる国となっているケース(移民)も数例あった(表5参照)。

c）職業

クルーズ船の乗客は定年退職者がほとんどと思われているが、本調査では全体の半分ほど(49.1%)となった(表6参照)。就業者は33人(28.9%)で、職業上の地位は経営者層7人(6.1%)、医師と教員を含む中間管理職15人(13.2%)、社員5人(4.4%)、その他6人(5.3%)は機械技術者、薬剤師、教員、事務員などとなっている。就業者と学生の合計が35.1%で、これは6日のクルーズ船では夏休みを利用した家族連れや若いカップルなども多かったことが最大の要因だろう。専業主婦(7人)と失業中の人(1人)の合計は8人(7.0%)となった。

一方、24日だけに限った統計では、全体の64.3%が定年退職者で、専業主婦(11.9%)と合わせると、76.2%は仕事をしていない人たちで占められた。

d）同行者

乗員を除いた統計では、表7のとおり、夫婦・カップルでの参加が最も多い66人(63.5%)で、次に家族28人(26.9%)、友人14人(13.5%)となった。この標本には、夫婦・カップル、友人と家族が一緒にクルーズを楽しむケースが含まれる。また、乗員の夫に同伴し「乗客」として本調査に含まれているケースもある。

表7　乗客の同行者(複数回答)

(単位：人、%)

	実数	構成比
夫婦・カップルのみ	66	63.5
家族	28	26.9
友人	14	13.5

有効回答者数104人

e）世帯収入

次に世帯収入については、表8のように4グループに分類した。サンプルのほぼ半数が定年退職者で、就業者は3割を僅かに割っているが、15万ドル超の高額収入グループは全体の3割以上で最も割合が高い。この表からすると、10万ドル超15万ドル以下のグループは少ないが、世帯収入が比較的低くても乗船していることがわかる。より詳しく分析すると、15万ドル超のグループのうち25人がアメリカとカナダ国籍で、このグループの67.6%を占めている。乗員については、7人が5万ドル以下で、2人(ベルギー・オーストラリア)は5万ドル超10万ドル以下、10万ドル超15万ドル以下は1人(アメリカ)となった。

なお、米国労働省統計局の発表によると、2019年のアメリカ人の平均年収は5万3,490ドルである(U.S.BUREAU OF LABOR STATISTICS,2019)。

表8　世帯収入

(単位：人、%)

	実数	構成比
5万ドル以下	20	18.9
5万ドル超10万ドル以下	32	30.2
10万ドル超15万ドル以下	17	16.0
15万ドル超	37	34.9
合計	106	100.0

2-3．訪日回数、クルーズの乗船回数

a）訪日・来秋回数

日本に初めて来た回答者数は全体の半数(58人、51.3%)ほどで、これまでの訪日回数が1～5回は38人(33.6%)、6～9回は5人(4.4%)、10回以上は12人(10.6%)ほどいた(表9参照)。国籍・地域別では、最多訪日回数はオーストラリアの40回で、次いで20回(アメリカ3人と香港1人)、15・16回(香港各1人)、10回(オーストラリア2人)、6回(香港3人、アメリカ・台湾1人ずつ)で、2～4回は16人(アメリカ8人、オーストラリア3人、カナダ2人、香港・台湾・タイ各1人)、

表9　訪日回数

(単位：人、%)

	実数	構成比
0回(今回が初訪日)	58	51.3
1～5回	38	33.6
6～9回	5	4.4
10回以上	12	10.6
合　　計	113	100.0

1回は18人(オーストラリア6人、アメリカ4人、カナダ・イギリス・香港各2人、ドイツ・ニュージーランド各1人)だ。乗員については、日本が初めてという回答者は3人、2回目が4人、10回以上は3人だ。

また、この質問に答えた113人のうち、初めて秋田県を訪れた人は102人(90.3%)となっている。11人のリピーターのうち8人は乗客で、全員、今回が2回目の来秋となっている。残る3人は乗員で、その内の2人は2度目、1人は4度目の来県だ。なお、秋田県へのリピーターの乗客8人の国籍・地域は、香港(4人)、台湾(2人)のほか、ニュージーランド在住の中国人とカナダ国籍・カナダ在住の日本人が1人ずつだ。

b）クルーズの乗船回数

113人の有効回答者のうち、今回のクルーズが初めての人は乗員1人を含め僅か9人(8.0%)となった(表10参照)。これまでの乗船回数が1～5回目の人が41人(36.3%)で、そのうち今回が2回目という人が13人(11.5%)と最も多い。6～9回は16人(14.2%)、10回以上は47人(41.6%)で、そのうち10～19回(21人)、20～29回(14人)、30～50回(9人)で100回以上とした人が3人いた。上記の統計に乗員10人も含まれるが、そのうちの7人は10回以上の乗務経験があり、10～29回は4人、30、50、200回は各々1人ずつだ。

表10　クルーズの乗船回数

(単位：人、%)

	実数	構成比
0回(今回が初乗船)	9	8.0
1～5回	41	36.3
6～9回	16	14.2
10回以上	47	41.6
合　　計	113	100.0

c）日本でのクルーズの乗船回数

次に、日本におけるクルーズの乗船回数については、今回が初の乗船であるとする回答者は76人(71.0%)となっている(表11参照)。31人(29.0%)はこれまでも日本でのクルーズ船旅行をしており、乗船経験が1回という人は23人(21.5%)で最も多い。国籍・地域別にみると、日本でのクルーズ経験の最多の5回はアメリカで、4回はオーストラリア、3回はアメリカとイギリスが各々2人、そしてカナダとタイが各1人だ。また、乗員は9人で、このうち7人が日本へのクルーズは初めてとしている。

表11　日本でのクルーズの乗船回数

(単位：人、%)

	実数	構成比
0回(今回が初乗船)	76	71.0
1回	23	21.5
2回	0	0.0
3回	6	5.6
4回	1	0.9
5回	1	0.9
合　　計	107	100.0

2-4．秋田県の情報を入手した方法

先行研究によると、イメージと満足度は相関関係にある。2017年に国際教養大学アジア地域研究連携機構が実施した秋田市内での訪日クルーズ客の調査(根

岸・平成29年度JR東日本寄附講座受講生,2018）によれば、秋田県に来る訪日クルーズ客はあまり秋田県のことを知らずに到着しているとのことであった。そこで、秋田県に関する観光情報の入手先について、クルーズ船内の情報デスク、ガイドブック、ターミナルの観光案内所等9つの項目を設け、どれが最も有効であったかを1から7までのランクづけをして尋ねた。1が全く役に立たず、7が最も役立った情報源とした。

最も役立った観光情報源はクルーズターミナルに設置された観光案内所で、6割近くの人が、最高に役立った「7」か「6」を選んでおり、ターミナルでの情報の提供が非常に重要であることがわかる。標準偏差も、僅かではあるが最も小さい。また、オプショナルツアーを予約した人は11人いたが、10人までが「6」か「7」を選択した（表12参照）。

次に役立った情報源はグーグルマップ（5.30）で、微差で観光情報を提供する日本や秋田県や市などのインターネット上の情報（5.28）と続き、4番目はトリップアドバイザーなどのウェブ上の評価サイトで4.9ポイントを得た。このように、2～4位はネット上での情報発信の重要性が浮き彫りになっている。ガイドブックにはあまり秋田県の記載がないので、評価は低く5位（4.8）となっている。クルーズ船や旅行会社のインターネット上の情報、船内での県内情報やクルーズツアーのカタログの有用性は、おしなべて低い。ちなみに、船上では、インターネットへの接続は有料なので、秋田港ターミナルで提供されている無料のWi-Fiに多くの人がアクセスしている。

クルーズ客の中には、出発前に秋田港から市街地への交通手段や、秋田市内での観光についてインターネットで検索している人もいて、英語での観光情報の充実を希望しているコメントもあった。また、「秋田港駅の場所がグーグルマップに記載されておらず、クルーズ列車が発着する秋田港駅と秋田港ターミナルの距離がわからない」との意見もあった。興味深いのは、口コミ情報の有用性が挙げられる。ランキングの中では低いものの、家

表12　最も役立った秋田県の観光に関する情報源

情報を入手した方法	平均値	有効回答数	標準偏差
秋田港ターミナルの観光案内所	6.0	96	1.4
グーグルマップ	5.3	81	1.7
秋田・日本の観光情報ウェブサイト	5.3	73	1.6
トリップアドバイザーなどインターネット上の評価サイト	4.9	68	1.8
旅行ガイドブック	4.8	69	1.6
クルーズ船・旅行会社のウェブサイト	4.7	99	2.0
クルーズ船内での情報	4.7	79	2.2
クルーズツアーのカタログ	4.4	74	1.5
家族・友人からの口コミ	4.0	68	2.0

（注）1：全く役に立たなかった～7：最も役立った

族や友人たちからの情報が役立っていることがわかる。

2-5．クルーズ客の秋田県での行動

この節ではクルーズ客の秋田県での滞在時間、県内で利用した交通手段、訪問先、消費額について述べる。まず、クルーズ客の行動と属性(性別、年齢、職業、世帯収入、訪日・来秋・クルーズ・日本クルーズ回数、乗員・乗客、職業、寄港日の相関を調べた[1)]。ただし、全標本数がやや少なめで、統計上の相関が見られても、相関があると結論していないケースもある。

a）秋田県内での滞在時間

クルーズ客の滞在時間と消費額は強い相関関係にあるとされている。6日の船の秋田港での係留時間は16時間で、クルーズ客の秋田県での平均滞在時間は8.4時間だった(図2参照)。24日の係留時間は6時間で、クルーズ客は平均して2.9時間を秋田県内で過ごした。

なお、観光施設での聞き取り調査によると、クルーズ客は午前中に見かけ昼前後がピークで、午後はぐっと少なくなり早く船に戻ろうとする様子が見受けられ、18時の出航でも14時過ぎにはいなくなるとのことだった。これを踏まえ、多くのクルーズ客は遅くとも船の出発1.5～2時間前には船に戻ることが多いと観察している。

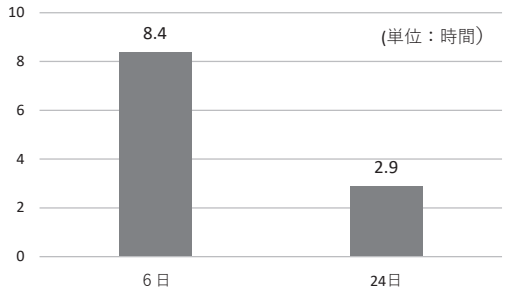


図2　クルーズ客の秋田県内での平均滞在時間

b）利用交通手段

まず、クルーズ列車は6日のみ運行され、また、6日のデータ収集地は秋田駅を含む市街地で、24日はクルーズターミナルのみだった。交通手段は複数の乗り物を利用した人もいる。

オプショナルツアーを予約せずフリーで市街地を巡るほとんどのクルーズ客は、市街地とクルーズターミナル間で頻繁に運行されるシャトルバスを利用している(表13参照)。6日のシャトルバスの料金は乗り放題15ドルだった。24日のシャトルバスは無料で、クルーズ列車の運行もなかったため、市街地への移動手段のほとんどはシャトルバスだった。24日はクルー

表13　寄港後に利用した交通手段(複数回答)

(単位：人)

	合計	6日	24日
シャトルバス	71	35	36
クルーズ列車	36	36	—
オプショナルツアー	9	3	6
レンタカー	6	6	0
電車(新幹線)	6	6	0
タクシー	2	0	2
バス(ぐるる含む)	2	0	2
その他(車いす)	2	0	2

(注) 1 クルーズ列車は8月6日のみ運行
2「ぐるる」は秋田市中心市街地循環バス

ズターミナルからタクシー観光の個人客も観察されたが、本調査には含まれていない。

なお、6日は船内では全くクルーズ列車の情報はなく、事前に日本語でインターネット等で情報検索していた乗客や、クルーズターミナルでクルーズ列車の案内を見た乗客が利用したようだった。クルーズ列車を利用した日本人夫婦(現在カナダに移民)は英語での情報の少なさを指摘した。

レンタカーを利用したのは香港から訪れた友人・夫婦の6人グループで、角館と田沢湖に行っている。6人とも日本へ3～15回も再訪し、来秋も2度目としたのは4人いた。6日の調査では、車いす利用者が2人おり、クルーズターミナルから秋田駅までは乗降が困難なシャトルバスではなく、クルーズ列車を利用していた。

ピアソン・カイ二乗検定では、日本と秋田県への再訪者及び日本でのクルーズのリピーターと比べて、日本初訪問者はシャトルバスの利用率が高く、レンタカーの利用率は低い。さらに乗員も、電車の利用率が乗客よりも僅かに高いとされた。日本に来たことのある人たちは、公共交通機関の利用率が高い。

c）行き先

まず、秋田市でクルーズ客に最も人気のある場所は千秋公園(82人)で7割以上の人が訪れており、次に秋田市民市場(25人)、秋田市立佐竹史料館(24人)、市立千秋美術館・県立美術館(19人)などと続いている(表14参照)。

ピアソン・カイ二乗検定によると、千秋公園はアジアからの客が他グループよりもやや少ない。訪日回数をみても、初来日の人はより多く訪れる一方で、6～9回の再訪者は皆無だった。

秋田県産品プラザでは、日本の再訪者の方が、初来日者よりも秋田県の物産に興味があるようだ。

次に、秋田市外の訪問先については、6日は船の係留時間が長いこともあり、クルーズ客は、レンタカー、クルーズ列車やオプショナルバスツアーを利用して、角館(15人)と田沢湖(6人)にも足を伸ばしている(図3参照)。角館に行ったのは、北アメリカと香港(各6人)、オーストラ

表14　秋田市での行先(複数回答)

（単位：人）

行　　先	合計	6日	24日
千秋公園	82	44	38
秋田市民市場	25	17	8
秋田市立佐竹史料館	24	11	13
美術館(市立千秋美術館・県立美術館)	19	14	5
秋田市民俗芸能伝承館(ねぶり流し館)	16	10	6
旧金子家住宅	13	4	9
秋田県産品プラザ(アトリオン地下)	12	10	2
秋田犬	11	11	0
セリオン	10	8	2
松下茶寮(千秋公園内)	8	6	2
百貨店(ショッピング)	6	3	3
聖体奉仕会	2	2	0
秋田市立赤れんが郷土館	2	2	0
秋田市土崎みなと歴史伝承館	2	2	0
温泉	2	2	0
秋田市立秋田城跡歴史資料館	1	1	0

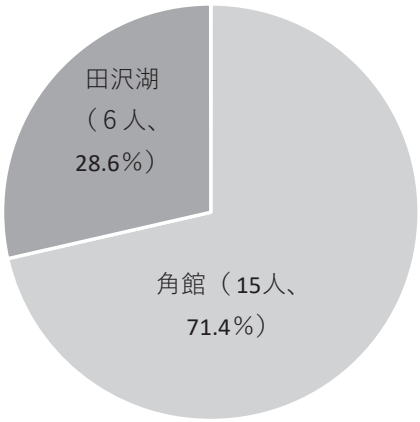


図３　秋田市外の訪問先（６日）

リア(2人)、ベルギー(1人)、田沢湖には香港のグループが訪れた。統計上の相関では、角館と田沢湖はアジアからの訪問者がより多く訪れている。「田沢湖に行きたかったが交通費が高く諦めた」と、コメントを残した人もいた。その一方で、秋田港での係留時間の短かった24日は、秋田市外への訪問者は皆無だった。

d）体験・経験

秋田市で最も人気のあった「体験・経験」は、秋田竿燈まつり(40人)で、続いて舞妓踊り(14人)、試飲・試食(9人)、ガイド付き観光案内(5人)などとなっている(表15参照)。

表15　秋田市で体験・経験した内容（複数回答）

（単位：人）

秋田竿燈まつり	40
舞妓踊り	14
試飲・試食	9
ガイド付き観光案内	5
お茶席	2
手作り体験	1

（注）6日のみ

6日は、クルーズターミナルで、体験プログラムや秋田県の地元の業者による独自のオプショナルツアーの販売の問い合わせがあった。これは多くの外国の港では、船内販売のオプショナルツアーよりも安価で地元のツアーを販売することが多い所以だ。実際は、舞妓踊りの案内はあったものの、この日の県内観光の目玉であろう秋田竿燈まつりの観覧席のチケット販売も、地元業者の提供するツアーの販売もなかった。

属性別では、舞妓踊りは熟年層に人気がある一方、秋田竿燈まつりは65歳以上で体験した人数が他の年齢層よりも少なめだった。

なお、24日は、1人のみが千秋公園のボランティアガイドを「体験」したと回答した。

2-6．消費行動

クルーズ客の消費額は様々な要因と相関があるとされている。ここでは、属性と消費額の相関関係をノン・パラメトリック検定を用いて計測したところ、性別、結婚歴、世帯収入、職業(乗員・乗客含む)での検定では有意な差が認められなかった。先行研究でも滞在時間と消費額に強い相関関係があるとされ、秋田県でも顕著であり、以下では、全消費額、4大消費項目の飲食費、入場料、買い物代、交通費の消費額を見る。

ａ）全消費額

6日の調査は、クルーズ客の全行動が終わった時点でのデータ収集ではなかったので、実際の消費金額と異なる可能性がある。しかしながら、クルーズ客の県内での消費活動は、国内での他港と比較しても活発とはいえない。全消費額が0円は28人(24.6%)で、特に24日は半数近くが秋田県でお金を使っていない(表16参照)。

船の係留時間が長かった6日は消費額が多く、最高消費額は40,200円、1人当たりの平均消費額は5,830円、中央値は3,000円だった。24日は最高消費額11,000円、平均消費額852円、中央値300円で、両日合わせた1人当たりの平均消費額は3,996円、中央値は1,500円。パラメトリック検定では、秋田県や日本に来たことのある人の方が、ない人よりも、消費額が多い結果となった。来秋経験者(11人)の平均消費額は7,544円、中央値は4,000円で、初訪問者(102人)の平均消費額は3,580円、中央値は1,120円だ。

消費額の低さの理由を問うと、「もっとお金を使っても良かったが、東京で6泊して、昨日、青森港でも丸1日観光し、今日は短い停泊時間なのでのんびりしたい」、「長い滞在だったら、もっとお金を使っただろう。店の洋服も良さそうだった」。その一方で、「寄港地ではいつも街歩きするだけ」、「日本の洋服はサイズが小さい」などのコメントがあった。「『稲庭うどん』ばかりが強調されているが、うどん以外の食べ物が食べたかった」としたのは、親子連れの十代の娘の発言だった。

ｂ）飲食費

1人当たりの平均飲食費は1,321円で、6日は1,990円(中央値は1,350円)、24日は174円(同0円)だ(表17参照)。消費額0円は、6日は17人(23.6%)、24日は32人(76.2%)で、1,000円以下は6日の17人

表16　全体の県内消費額

（単位：人、%）

	合　計		6日		24日	
	実　数	構成比	実　数	構成比	実　数	構成比
0円	28	24.6	8	11.1	20	47.6
1円～1千円以下	24	21.1	12	16.7	12	28.6
1千円超～2千円以下	13	11.4	5	6.9	8	19.0
2千円超～3千円以下	14	12.3	14	19.4	0	0.0
3千円超～4千円以下	7	6.1	6	8.3	1	2.4
4千円超～5千円以下	1	0.9	1	1.4	0	0.0
5千円超～1万円以下	12	10.5	12	16.7	0	0.0
1万円超～3万円以下	14	12.3	13	18.1	1	2.4
3万円超	1	0.9	1	1.4	0	0.0
合　計	114	100.0	72	100.0	42	100.0
最高消費額	40,200円		40,200円		11,000円	
平均値	3,996円		5,830円		852円	
中央値	1,500円		3,000円		300円	

表17　県内の飲食費

（単位：人、%）

	合　計		6日		24日	
	実　数	構成比	実　数	構成比	実　数	構成比
0円	49	43.0	17	23.6	32	76.2
1円～1千円以下	25	21.9	17	23.6	8	19.0
1千円超～2千円以下	15	13.2	13	18.1	2	4.8
2千円超～3千円以下	10	8.8	10	13.9	0	0.0
3千円超～4千円以下	5	4.4	5	6.9	0	0.0
4千円超～5千円以下	7	6.1	7	9.7	0	0.0
5千円超～1万円以下	3	2.6	3	4.2	0	0.0
合　計	114	100.0	72	100.0	42	100.0
平均値	1,321円		1,990円		174円	
中央値	500円		1,350円		0円	

(23.6%)、24日の8人(19.0%)で、この2グループで全体の64.9%も占める。24日の出港は14時で、「船長主催のバーベキュー」が昼食ということもあり、多くのクルーズ客が足早に昼食に戻る姿が見られた。6日は市街地で食事をとる客も多かったが、昼食のために船に戻る客の姿も多かった。船内での飲食はクルーズ料金に含まれるため、海外の調査でも、寄港地でのクルーズ客の飲食費は低い結果となっている。乗員は乗客よりも飲食費の支出が高いとする海外での調査結果があり、6日の乗員7人の飲食費は2,466円と乗客よりも高く、全乗員が県内で飲食しているが、統計的に有意な差は見られなかった。さらに、来秋経験者は平均2,900円、中央値2,000円、初訪問者は平均1,125円、中央値150円と、パラメトリック検定からは秋田県に再訪している人は県内食文化の魅力を享受している。

ほかにも、初クルーズ客の飲食費は低い(平均415円、中央値0円)。一方で、日本へのクルーズのリピーターの飲食費の消費額は高め(平均2,051円、中央値1,000円)だった。さらに、年齢の差も明らかとなり、最も低かったのは65歳以上で、平均消費額834円、中央値は0円、次は25～34歳(平均1,250円、中央値600円)、50～65歳(平均1,598円で中央値600円)、そして比較的消費が多かったのは、35～49歳(平均1,890円、中央値3,000円)で、次いで18～24歳(平均1,860円、中央値1,200円)だ。

c）入場料等

最も人気の高かった行き先は千秋公園だが、入園料金は無料で、75.4%(6日は72.2%で24日は81.0%)の人が全く入場料等にお金を使っていない。パラメトリック検定では、居住国での差が明らかとなった。ヨーロッパからの人たちは、アメリカとアジアから来たクルーズ客より、文化施設での経験にお金を使っている。両日合わせたヨーロッパの平均は593円(中央値は350円)だった。ちなみにアメリカ大陸の客の84%は消費額0円で平均値は

83円、中央値は0円、オセアニアは0円は75％で平均値は242円、中央値は0円、アジアは0円は81％で平均値は243円、中央値は0円だった(表18参照)。

d）買い物代

秋田県での買い物の消費額の平均は1,276円、中央値は0円、6日の平均は1,699円、中央値は0円、24日の平均は552円、中央値は0円だった(表19参照)。両日合わせた消費金額0円は83人(72.8％)(6日は69.4％、24日は78.6％)で、あまりお金を使っていない。今回の調査で最高金額の4万円の買い物をしているのは、香港から友人らと来た54～64歳の定年退職者の女性で、クルーズ列車に乗って、おそらく秋田駅でレンタカーを借りて田沢湖や角館に行き、世帯収入は15万ドル以上の高額所得者だ。また、これまでにも6回日本を訪れ、秋田県にも1度来ている。パラメトリック検定では、過去の日本へのクルーズ回数、再訪日回数によって、消費額の差が明らかとなった。特に10回以上来日している人たち(平均値2,375円、

表18　入場料の消費額

（単位：人、％）

	合　計		6日		24日	
	実　数	構成比	実　数	構成比	実　数	構成比
0円	86	75.4	52	72.2	34	81.0
1円～1千円以下	23	20.2	15	20.8	8	19.0
1千円超～2千円以下	2	1.8	2	2.8	0	0.0
2千円超～3千円以下	3	2.6	3	4.2	0	0.0
合　計	114	100.0	72	100.0	42	100.0
平均値	207円		264円		110円	
中央値	500円		0円		0円	

表19　買い物の消費額

（単位：人、％）

	合　計		6日		24日	
	実　数	構成比	実数	構成比	実　数	構成比
0円	83	72.8	50	69.4	33	78.6
1円～1千円以下	7	6.1	6	8.3	1	2.4
1千円超～2千円以下	7	6.1	1	1.4	6	14.3
2千円超～3千円以下	8	7.0	7	9.7	1	2.4
3千円超～4千円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4千円超～5千円以下	2	1.8	2	2.8	0	0.0
5千円超～1万円以下	6	5.3	5	6.9	1	2.4
1万円超～3万円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3万円超～4千円以下	1	0.9	1	1.4	0	0.0
合　計	114	100.0	72	100.0	42	100.0
平均値	1,276円		1,699円		552円	
中央値	0円		0円		0円	

中央値10,750円）は、初訪問(同572円、同0円)の人と比べて、消費額が高く、日本クルーズリピーター(平均2,710円　中央値0円)も、日本初クルーズの人(同473円、同0円)よりも消費額が高かった。

ｅ）交通費

24日のクルーズ船の停泊時間は短く、シャトルバスが無料で提供されていたので、この日の交通費の支出は、秋田市内でタクシーを利用した1人だけだった。6日のクルーズ客の多くは、船内でシャトルバスのチケットを購入していたので、市街地での交通費が0円となった人たちは34人(47.2%)で、クルーズ列車やタクシー、バス等を利用した人は30人(41.7%)だ(表20参照)。角館と田沢湖など市外に行った人たち8人(11.1%)は、レンタカーや電車での移動で、交通費は4,000～20,000円と高めになった。

ノンパラメトリック検定でも、両日の差に加え、訪日・来秋回数での差が明らかとなった。秋田再訪者は平均327円、中央値200円、初訪問者は、平均1,293円、中央値0円で、前者の方が公共交通機関を利用しているといえよう。今後、日本や秋田県へのリピーター客の増加により、公共交通機関の利用増加が見られるだろう。

2-7．秋田県での滞在の満足度

秋田県での滞在の満足度を、移動・買い物経験や、情報の得やすさ、飲食店・商店等の対応、再訪意欲等の27の項目で尋ね、最高に満足を7とし、最も不満を1とした。

最も高く評価されたのは、表21のとおり、秋田県での熱烈な歓迎で、平均値6.39の高得点を得た。これは、以下の第3節の4部で詳述するが、秋田港での一連の歓迎行事等によることも大きいだろう。次は、安全性の高さ(6.36)だ。また、「体験・経験」の満足度も高く、ほとんどのクルーズ

表20　交通費の消費額

（単位：人、%）

	合　計		6日		24日	
	実　数	構成比	実　数	構成比	実　数	構成比
0円	75	65.8	34	47.2	41	97.6
1円～1千円以下	31	27.2	30	41.7	1	2.4
1千円超～2千円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2千円超～3千円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3千円超～4千円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
4千円超～5千円以下	2	1.8	2	2.8	0	0.0
5千円超～1万円以下	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1万円超～2万円以下	6	5.3	6	8.3	0	0.0
合　計	114	100.0	72	100.0	42	100.0
平均値	1,192円		1,878円		17円	
中央値	0円		200円		0円	

表21　秋田県での滞在の満足度

		平均値
1	住民は歓迎・友好的である	6.39
2	安全・安心な旅行ができた	6.36
3	秋田県を訪問できて満足	6.26
4	来県について、友人らに肯定的な感想を伝えるつもり	6.25
5	クルーズ列車は格別な体験となった	6.17
6	飲食店でのサービス・おもてなしが良い	6.06
7	公共交通機関を簡単に利用できた	6.03
8	県内で撮影した写真をソーシャルメディアなどに載せるつもり	5.98
9	秋田港のクルーズターミナルは秋田県の好感度向上に繋がっている	5.92
10	機会があったら、また来県したい	5.69
11	県内には固有の観光資源があり訪問する価値がある	5.66
12	県内の観光資源をよく知らずに来県した	5.62
13	興味深い文化体験をした	5.56
14	英語で表記された標識があると、もっと簡単に歩き回ることができる	5.53
15	買い物に満足している	5.37
16	歴史遺産が多彩である	5.30
17	インターネット上の県内交通情報が役に立った	5.00
18	買い物した際、価格が手ごろだと感じた	4.97
19	天気が良かった	4.95
20	国内の他地域と比べて、魅力的な地域である	4.94
21	十分な観光情報を得られた	4.94
22	固有の食文化があると感じた	4.91
23	クルーズ列車のスケジュールは利便性が高かった	4.74
24	商店や飲食店での英語での対応は十分だった	4.37
25	秋田県への訪問は、この旅行の主な目的である	4.28
26	今日、出発する前に予定をはっきり決めていた	4.10
27	障害者用のアクセスが充実していた	3.96

（注）1：最も不満～7：最高に満足

客は非常に満足していることがわかる。

その一方で、課題も浮き彫りにしている。秋田県の知名度の低さ、県内の主たる観光資源を知らなかった(5.62)、秋田県訪問が主たる旅の目的とした人は少なく(4.28)、今後の対応策のヒントを示している。また、クルーズ船は高齢者が多いものの障害者用のアクセスの満足度(3.96)は最も低く、改善していく必要があろう。

満足度とクルーズ客の属性間に統計的に有意な差があるかをパラメトリック検定で調べると、多くの違いが現れた。到着日6日/24日、乗員/乗客、性別、国籍・地域、居住地、年齢で差が計算され、また、以下に記すように27のうち20の質問の満足度に差が現れた。

満足度順位トップ3の「住民は歓迎・友好的」、「安全・安心な旅行ができた」と「秋田県を訪問できて満足」については、すべてのクルーズ客が高い評価をしている。これは、秋田県にとって非常に喜ぶべき結果と言えよう。

4位の口コミ効果「秋田県について友人らに肯定的な感想を伝えるつもり」(6.25)については乗客・乗員で差が見られ、乗員はすべて7としたが、乗客だけの平均値は6.17だった。以下の統計でも、乗員の方が乗客よりも秋田県への好感度と、期待される口コミ効果が高いようである。

5位の「クルーズ列車体験」(6.17)は、6日にクルーズ列車に乗船した36人中30人が回答しており、アメリカ国籍(6.45)とヨーロッパ国籍(5.00)で若干の差が生じた。ヨーロッパではトラムなど電車を主要な交通手段とする地域も多いが、アメリカでは電車が少ないことも一因で列車の旅を楽しんだのかもしれない。

6位の「飲食店のサービス・おもてなし

が良い」(6.06)については、6日が5.86、24日は6.65と、到着日で差がみられた。6日は秋田竿燈まつりで忙しかったことが要因かもしれない。

7位の「公共交通機関を簡単に利用できた」(6.03)には、性別で差が見られ、女性(6.68)は男性(5.74)よりも容易としている。

8位の「秋田県の写真をソーシャルメディアなどに載せる」(5.98)は、乗員(7.00)が乗客(5.86)より高く、世帯収入5万ドル以下(6.80)は、5万ドル超10万ドル以下(5.46)より高かった。乗員の方が、ソーシャルメディアを利用して秋田県のことを周囲に伝える頻度が高いようだ。

9位は「秋田港のクルーズターミナルは秋田県の好印象に繋がっている」(5.92)は、6日(5.67)と24日(6.36)で差が見られた。24日は6日よりも小さい船だったので、施設をゆったりと使えたことが一因かもしれない。

10位の「また秋田県に来たい」(5.69)はグループ間の差が見られず、秋田県にとっては嬉しい満足度の高さだ。

11位「秋田県固有の観光資源は訪問する価値がある」(5.66)には、初クルーズの人たち(6.63)よりも、クルーズ回数が1～5回(5.37)、6～9回(5.40)は低い。クルーズ客は旅慣れていることもあり、秋田県固有の観光資源をより一層磨き上げる必要があろう。

12位「県内の観光資源をよく知らずに来県した」(5.62)は、再来秋者は低く(平均4.22、中央値5)、初来秋者は(平均5.76、中央値6)高く、また、以前にも日本にクルーズで訪れている人たちも低く(平均5.03、中央値6)、日本初クルーズ(平均5.89、中央値7)、さらに、6日(平均5.41)は低く、24日(平均5.97)は高めだった。これは予想通りの結果とも言えるが、日本や秋田県への再訪者が増加すると、秋田竿燈まつりのほか、多くの観光資源の情報も広がるといえよう。

13位「興味深い文化体験をした」(5.56)は、女性(5.84)が男性(5.42)を僅かに上回った。

14位「英語の標識があると、もっと簡単に歩き回れる」(5.53)は、年齢(65歳以上平均5.97：中央値7は、若い層18～24歳の平均4.20：中央値4、25～34歳平均5.10中央値5よりかなり高い)、訪問日(6日の平均5.19中央値5、24日の平均6.16、中央値7)で差が見られた。秋田県に来るクルーズ船の乗客は年齢が高いので、年齢による満足度の差は英語標識の増加の必要性を示している。

15位「買い物に満足している」(5.37)は、女性(5.90)の満足度は男性(5.05)よりも高いものの、回答者は全項目で最も少なかった(N＝15)。

16位「歴史遺産が多彩である」(5.30)については差が見られず、どのグループも一様に秋田県の歴史的遺産を認識しているようだ。

17位「インターネット上の県内交通情報が役立った」(5.00)は、女性(5.85)の方が男性(4.27)よりもはるかに高い。

18位「商品価格が手ごろ」(4.97)は、性

別(女性5.57、男性4.49)、乗客(4.85)・乗員(6.00)、収入(最高収入グループ15万ドル超(4.40)と5万超10万ドル以下(4.67)は、10万超15万ドル以下(5.81)より低い)で、差が生じた。この違いは、通常は女性の方が男性よりも買い物していることや、世帯収入が10万超15万ドル以下は他の収入グループよりも買い物の「消費額0円」が少なめだったことが要因かもしれない。

19位の「天気が良かった」(4.95)は、クルーズ回数が10回以上(5.60)は、1～5回(4.54)、6～9回(4.06)と比較して高く、再来秋者(5.25)は初来秋者(4.95)よりも高く、気温の高かった秋田竿燈まつりの日は低く(4.47)、24日は高かった(5.76)。また、乗客は低く(4.83)、乗員は高かった(6.10)。

20位の「国内の他地域よりも秋田県は魅力的だ」(4.94)では、乗客は4.82、乗員は5.90で、差が1ポイント以上だった。

21位「十分な観光情報を得られた」(4.94)は、アメリカ・カナダ居住者が低く(4.36)、アジア(6.00)に住む人は高かった。なお、この満足度は他の満足度と比して相対的に低いので、今後観光情報の提供に力を入れる必要があろう。

22位「秋田県には固有の食文化がある」(4.91)は、乗客(4.73)と乗員(6.25)で差が出たが、乗員10人中8人が秋田県で食事をした反面、乗客の45.2%は食事をしなかったことが影響しているのだろう。

23位「クルーズ列車のスケジュールは利便性が高かった」(4.74)は、角館を訪れた香港のグループが電車の発着時刻を誤り1時間以上秋田駅で待ったため、アジア国籍(3.20)が低くなった。

24位「商店や飲食店での英語での対応は十分だった」(4.37)は6つの属性での統計的な差が見られ、満足度の項目中で最もグループ間の差が大きくなった。まず、来秋回数(初来秋：4.51　再来秋：2.71)と訪日クルーズ回数(初4.72、再日本クルーズ3.72)で差が見られた。居住国でも差が見られ、アメリカ・カナダ居住者(4.89)とヨーロッパ居住者(4.75)に比して、アジア居住者(2.55)が低い。収入でも、5万ドル以下は低く(3.67)、10万超15万ドル以下は高かった(5.61)。秋田県再訪者自体は少ない(N＝7)が、初来秋者と比較すると、平均値が低いのはアジア人の平均値の低さに由来する。今回の訪問中、言葉が通じずに困った経験があったのかもしれない。

25位「この旅の主目的は来秋すること」(4.28)も多くの差が見られ、訪日・来秋回数、国籍・地域、乗員/乗客と来秋日で差が見られた。訪日回数10回以上(5.66)は、初来日(3.98)と1～5回(3.97)よりも高く、再来秋者(6.00)も初来秋者(4.10)よりも高かった。さらに、アジア国籍(5.55)がヨーロッパ国籍(3.77)よりも高く、6日(4.54)は24日(3.82)より高かった。加えて乗員(5.56)が乗客(4.14)よりも高かった。この結果は、訪日、来秋の回数が増えるにつれ、秋田県を訪れたいと動機が上がり、今後の訪日客の増加は秋田県への訪問を促すとみられる。

26位は「今日の出発前に予定をはっきり決めていた」(4.10)は属性での差は見られず、県内の観光資源がよく理解されていないことを示しているようだ。

最下位「障害者用のアクセスが充実していた」(3.96)は、回答者は少なく(N＝27)、グループ間での差は見られなかったものの、高齢化が進む秋田だからこそ、高齢者の多いクルーズ客にもより良い訪問環境を提供することが望まれる。

2-8．秋田県に対する印象やコメント

1：秋田県の印象、2：秋田県に再訪したくなる理由、3：これから秋田県に来る旅行客の満足度を上げるための提言の3つの項目について、数語でコメントを求めた。

a）秋田県の印象

100人から回答があり、実に自由で様々な表現が用いられたが、ほとんどは肯定的なもので、秋田県での滞在が大変良い印象を与えていることがわかる。多様なコメントは、街、人、歴史・文化(祭り)、交通(観光しやすさ)、天気、観光資源、その他に分類される(表22参照)。

まず、テーマ別に分析すると、最も多くのコメントは「街」(city, town, place, environment; street)についてで、clean (17人)、nice(9人)、beautiful(8人)などと表現し、秋田はまずは清潔で快適で、美しく、歓迎され、友好的で、素晴らしく、歴史を感じる場所と言えよう。

表22　秋田県に対する印象や主なコメント(複数回答)
(単位：人)

街	51	clean
		nice
		beautiful
		fun
		peaceful
		welcoming
		friendly
		wonderful,good
		lovely
		great
		small/medium size
		inviting
		historic
		safe
		adorable
		pleasant
人	24	friendly
		nice
		helpful
		welcoming
		polite,courteous
		pleasant
		warm
歴史・文化(祭り)	22	Kanto
		culture
		history
		heritage
		Samurai house
		interesting
交通(観光しやすさ)	12	easy
		good transportation
		excellent transportation
		map and tourist information is good, excellent
天気	8	hot
		warm
観光資源	7	park
		museum
		market
その他	6	dog
		food and drinks
		Wi-Fi
		coffee shop,tea room

次いで多かったのはpeople・residents「秋田の人」で、24人が秋田の人にとても肯定的なコメントを書いている。friendly（16人）、nice（5人）、helpful（4人）、welcoming（3人）、warm, polite、courteousなどの形容詞とともに用いられた。「秋田の人は自分たちの文化と街を愛している」といった観察をした人もいた。観光情報提供や、クルーズ客へのサポートの気運を高く評価しているコメントもあり、「秋田県の印象」は極めて良好ということがわかる。

3番目のテーマとしては、「歴史と文化（秋田竿燈まつり）」で、興味深い、独特な、そして豊かなといった修飾語とともに使われ、22のコメントが記載され、秋田の独特の祭りの文化や侍の歴史を印象付けたようだ。

4つ目のテーマとしては、秋田市内の個別の「観光資源」が挙げられ、千秋公園（7人）の美しさが特筆されたものの、美術館（3人）に関するコメントは英語の表記のないことや展示スペースが小さいことなどが挙げられた。

一方で、移動に関するコメントでは、街歩き（walk/get around）について、easyとした人は5人おり、秋田市街の規模が歩き回るにはちょうど良い大きさとするコメントだ。その一方で、千秋公園が大きすぎるとのコメントをした人が1人おり、65歳以上の人からだった。千秋公園は秋田市内で最も人気のある観光資源で、しかもクルーズ客の多くが高齢者ということを考慮すると、効率的に公園内を散策できるように、今後改善する必要があろう。

先にも述べたが、秋田港到着後の情報発信機能を高く評価する声（4人）もあり、オプショナルツアーのガイドや、クルーズターミナルでの情報の提供が非常に高く評価されていることがわかる。

コメントで最も頻繁に使われた単語はveryで、35回も出てきて、好意的な表現を強調するために用いられている。秋田県について非常に強く好印象を受けていることがわかる。

次に頻出した単語はfriendlyで、29人が用い、次いでnice18人、clean17人となった。これらの表現は、単独で用いられるほか、人や街について使われている。さらに、6日は秋田竿燈まつり期間中だったこともあり、「秋田竿燈まつり」と書いた人が6日に12人いた。

そして、beautiful は7人が使い、街、秋田犬や千秋公園を表現する形容詞として使われている。interesting（5人）も複数出てきた表現だが、主に、文化と歴史に結びつけており（4人）、秋田の文化や歴史が興味深い印象を刻んでいることがわかる。

その他の印象は、peaceful, lovely, great は各々2人ずつ、1人がadorableと表現した。また、千秋公園とクルーズターミナルで秋田犬に触れ合う機会があり、「秋田犬」をあげた人は3人いた。

以上ほとんどのコメントは、好意的な印象を記しているが、僅かながら不満を記した人がいる。美術館について、先に

も述べたが、英語に訳されたものがないことを2人が指摘し、別の人は「Wi-Fiとカフェが探せない」と嘆いている。カフェに関しては、次節で述べる聞き取り調査でも、多くの観光関連業者がクルーズ客からカフェの場所を問われていることが明らかになっている。

b）秋田県再訪の意図

有効なコメントは76人から得られた。最も多い再訪の理由は、秋田市外など行けなかった地域を見たい(21人)で、県内での滞在時間が限られていたことが最大の理由だ。

その次は、再度見たい・体験したいという希望で、秋田県の文化や美しさ(17人)、秋田県の人たち(11人)、秋田竿燈まつり(8人)、秋田犬(6人)、清潔さ(3人)、食べ物(2人)に惹かれている。秋田県での経験がとても良い印象となっており、再訪へ繋がる動機としている。また、今回は体験できなかった涼しい季節(6人)、桜(3人)、温泉(2人)も再訪の理由としている。その他、友人を案内したい、買い物、観光案内所の素晴らしさ、安全、雑貨品等の価格(1人)を、再度秋田県に来たい動機としている。このように、多くのクルーズ客の県内滞在の満足度は高く、また来たいとの希望を抱いていることがわかる。その一方で、もう来ないとしているのは3人で、本人の「年齢」や「遠さ」、「秋田市は小さい」を理由に挙げている。

c）秋田県への提言

半数ほどの55人から回答を得て、そのうち10人は、「到着から出発まですべて手際良かった」、「とても満足」、「このままの素晴らしさを続けて」や「ガイドブックの情報は少なかったが、オンラインでは十分な情報を得られた」などの理由から、「提言はない」と記している。

その一方で、改善の提言として最も多かったのは英語の表示で、15人が標識やメニュー、公園、美術館・博物館などの英語表記の増加を望んでいる。これは、満足度調査でも浮き彫りになっている。次に多かった提言は移動に関してで、7人が「秋田市中心市街地循環バス『ぐるる』の時刻表がなかった」、「クルーズ列車の駅の場所をグーグルマップに掲載してほしい」、「もっと域内の移動交通手段の情報の提供を」など、移動に関する情報の充実を挙げ、6人がクルーズ列車の増便を希望している。

更に各々の人数は少ないが、秋田県への貴重な助言として、「現地ツアーガイドの待機」(1人)、「駅やクルーズターミナルでのオプショナルツアー・秋田竿燈まつり観覧席の予約を可能に」(2人)、「県内観光地5選のリストアップ」(1人)、「稲庭うどんばかりではなく他の日本・外国メニューを」(2人)、「ターミナルや公的施設の冷房設備の充実を」(4人)、「もっとWi-Fiを」(2人)、「街中への観光の前後に港で手工芸品の手作り体験」(1人)、「戸外での体験アクティビティ」(1人)、「車いすのアクセスの向上」(1人)、「クルーズ船への希望だが、

立ち寄り港となる秋田県のより詳細な情報提供を」(1人)と、秋田県にとって参考になる提言をしている。全く異なった視点だが、船が埠頭に着岸した折の歓迎について2人がコメントを寄せている。それは、「連続して尽きることなく流れる音楽(民謡)の音量が高すぎる」と「出迎えの挨拶は音量が低くて船からは聞こえない」とし、これは今後の対応が比較的に可能だろう。

以上、3つの自由な回答の質問について、クルーズ客からのコメントを分析すると、秋田県で受けた歓迎とおもてなしがとても高く評価されていることがわかり、できれば、現在の「歓迎」状態を継続すれば、クルーズ客の満足度も高いままだろう。その一方で、多くの人が指摘しているように、英語の表記を徐々に充実させ、また、インターネット上に英語で県内の観光情報や交通手段等の情報を増やすことも必要だろう。また、クルーズターミナルでのオプショナルツアーの販売、秋田県ならではの「手作り体験」商品を提供するのも一案だろう。

3．秋田市内の観光施設等からの聞き取り調査

3-1．聞き取り調査の概要

今回のクルーズ客へのアンケート調査は、2019年度の秋田県へのクルーズ船の来航が13回あったうちの僅か2回のみの実施で、しかも調査方法も限られていた。そこで、クルーズシーズンが終わった2019年12月に、秋田市内の主たる観光、商業施設等からも聞き取り調査を実施し、クルーズ客の県内での行動を多角的に調べ、また地元の観光業のクルーズ客への対応、さらに、今後の課題を明らかにする。

3-2．観光施設

a）秋田市立佐竹史料館

秋田市立佐竹史料館(以下、「佐竹史料館」)は、千秋公園の二の丸広場近くに位置し、秋田藩主佐竹氏に関する歴史史料を展示している。

最も多くのクルーズ客が訪れたのは千秋公園だったが、来訪人数を正確に調べる資料はない。クルーズのシャトルバスが発着するのは千秋公園の近くということもあり、本調査では、佐竹史料館は、訪問先第2位の秋田市民市場に次いで3番目に多くクルーズ客が訪れている。

佐竹史料館はどのオプショナルツアーにも入っていないものの、クルーズ船の寄港日は来館人数が増加する。この史料館は、装飾が派手で、外国人受けする派手な藩主の鎧のコレクションが極めて多く、日本海側のクルーズ船の寄港地で、ここに匹敵する博物館はないとしている。これまでは、千秋公園に来たついでに佐竹史料館の存在を知り入館する人が多いようだったが、英文で書かれた佐竹史料館に関する小冊子(Negishi,2019)が刊行された2019年度からは、ここに来る事を目的とする人が目立つようになったという。

クルーズ客は年配の個人客が多く、歴史や文化に興味のある人が「予習して」来館しているように見受けられる。また、クルーズ船からの入館者はほとんどが欧米人で、アジア人はとても少ない。

クルーズ船の寄港日は事前に知らされており、クルーズ客は増加傾向にあるので、それに対応して外国人に人気の高い甲冑や刀を展示するようにしている。また、Wi-Fiが利用できないことへの不満が多く寄せられたが、これについては、市の方針により2019年度末までにWi-Fiの導入が完了した。

また、「コーヒーが飲みたい」という問い合わせがよく聞かれるが、館内での対応は難しく、公園内のベンチ増設等のサービス向上が必要とされている。また、千秋公園内の松下茶寮でも、コーヒー販売の看板を2018年から設置し、クルーズ客へ対応している。

このように、展示内容の変更や英語での冊子を作るなど、クルーズ客向けの対応を少しずつ向上しており、館内での英語対応も改善しているが、さらなる英語の展示説明や休憩場所の設置、カード決済の導入等は今後の課題としている(表23参照)。

b）秋田市民俗芸能伝承館

通称「ねぶり流し館」は、秋田市内の民俗行事や芸能保存伝承のために、秋田市が1992年に開館した。ここでは、秋田竿燈まつり期間以外でも竿燈の実演や、来館者が竿燈の演技を体験できる。また、隣接した江戸時代後期の町屋の特徴を残す旧金子家住宅は、市の指定有形文化財で、昭和初期の綿・麻織物などの商いの店先の様子や幕末に建てられた土蔵などを見学できる。

ねぶり流し館は、クルーズ船のオプショナルツアーに組み込まれており、団体客の来館に合わせて竿燈の実演をしている。総来館者数は2015年より増加しており、外国人の来館者も「右肩上がり」で年々増加している。40代以降の中年、年配者が多いが、夏休みは家族連れのクルーズ客が増える。英語表記は2017年度末より始めており、多言語のパンフレットを用意している。オプショナルツアーに参加していないクルーズ客もポツポツと個人で来るが、目的意識を持って来館する人たちがいる一方で、「何が見られるのか」分

表23　秋田市内観光施設の概要

	主な展示内容	アクセス
秋田市立佐竹史料館	秋田藩主佐竹氏関連の歴史史料を展示	秋田駅から徒歩８分 千秋公園内に位置
秋田市民俗芸能伝承館 ねぶり流し館	秋田竿燈まつり、三吉凡天祭、土崎港曳山まつりの置山車を展示 竿燈の実演を披露	秋田駅から徒歩16分 市指定有形文化財・旧金子家住宅隣
秋田市立赤れんが郷土館	秋田市の歴史、民俗、美術工芸に関する展示 明治期の貴重な洋風建築で、国の重要文化財に指定	秋田駅から徒歩16分

からずに来る人も多い。

クルーズ客は、実演を見逃しても、ビデオや写真その他の展示を見たり、「祭り半纏」を着て「提灯」と一緒に写真を撮ったりするだけでも満足しているようで、自由に書き込みのできるホワイトボードに好意的なメッセージを残すことが多い。また、竿燈が多くの国に出かけているのを展示から知り、自国にも来ていることがわかると親しみを増すようだとしている。

ｃ）秋田市立赤れんが郷土館

赤れんが郷土館は、約100年前に建てられた旧秋田銀行本店で、国の重要文化財である。現在は秋田市の文化施設として、郷土の木版画家・勝平得之と人間国宝の鍛金家・関谷四郎の作品を展示し、来館者数は年間2万人強を数える。

この施設はオプショナルツアーに組み込まれており、クルーズ船の寄港に合わせ、休館日でも開館する。「こんなに来るとは思わなかった」ほど、クルーズ客は増加している。ここは、クルーズのシャトルバスの発着所から離れているので、フリーのグルーズ客は、秋田市中心市街地循環バス「ぐるる」と、「くるりん周遊パス」(秋田市内9つの文化施設の共通観覧券)を利用し、秋田観光コンベンション協会作の地図を携えるなど、あらかじめ情報を得て目的を持って訪れるケースが多い。外国人の来館者が増えているので、ＱＲコードで展示品の説明を作り、目録も英語で出版している。勝平得之の絵葉書セットが土産物として人気が高く、カード決済はしていないが、値段をコインのイラストでわかりやすく提示している。

ここでも、コーヒーを飲める場所を尋ねられることが多いが、館内にはない。更に、この辺りは夜営業する繁華街のため、目の前にある小さな喫茶店以外、ほとんどの店が日中は閉まっている。また、駐車場はバス1台のみ入れる大きさで、これも問題としている。Wi-Fiを希望する意見も多かったが、市の方針として、2019年度末までに設置された。

３-３．商業施設

ａ）秋田市民市場

クルーズ客が大量に訪れているとは言えないが、確実に増加している。秋田市民市場(以下、「市民市場」)がオプショナルツアーに入っているクルーズ船の場合は団体客が来るが、全てのオプショナルツアーに組み込まれてはいない。そのため、英語の表示等の必要性を感じているものの、「対応するきっかけ」を掴みきれないままでいる。また、Wi-Fiはあるものの繋がりにくく、改善の必要性を認識している。船内へ「生もの」の持ち込みが制限されているため、「その場で食べられるもの」、果物、100円ショップ、飲食店の需要が高い。「買うよりも珍しいものを見たい」とする客が多く、購入には結びつかないことが多いが、アジア人は出汁昆布や貝柱等の乾物の購入がよくあるとしている。

個々の店によって外国人への対応は異なっているが、身振り手振りや簡単な英単語でそれなりの対応をしているようだ。日本語を片言で話す旅行者もおり、それほど対応に苦慮しているようではない。また、外国人に人気の回転寿司店には英語のメニューもあり、入口に「現金払いのみ」と英語で大きく書いた看板を出している。カード決済への対応は、今後の課題だ。

一方、最近の変化で、青森県の市場で人気の「のっけ丼」と同じように、市場内の新鮮な魚介類や肉、惣菜等好きな具材を購入して、丼のご飯にのせ、場内の休憩所等で食べられるようにした。まだ始めたばかりだが、反応は良い。丼のご飯を販売する弁当屋は、すぐに食べられる惣菜等も扱い、クルーズ客にも人気がある。

最後に、広報に関しては、船内でのPRの可能性を秋田市より打診されるが、単独で独自のチラシを作成するなどの宣伝よりも、市内の主たる観光ルートの一つとして、その他の施設との連携に参加する方法を希望している。場内の多くの商店主は、口を揃えて、外国人の目立った増加を挙げており、英語対応やカード決済など改善の必要性を痛感しているようだが、市民市場全体で足並みを揃えた取組みには踏み切れずにいる状態だ(表24参照)。

b）秋田県産品プラザ(アトリオン内)

この施設は、秋田県内の清酒、漬物をはじめ工芸品、特産品など約4,000点の土産物を取り揃えているものの、オプショナルツアーに組み込まれていないので、個人客がパラパラ来ている状態だ。年々、クルーズ客への対応に力を入れ、少しずつサービスを加えている。その一つとして、豊富な品揃えの店内を見られるよう、グーグルストリートビューをホームページに載せている。店舗は地下にあり目立たないので、クルーズ船が来航する折は、通りに看板を出し、クレジットカード利用可の表示も加えている。店内の商品に英語の説明は全くなく、包装からは内容がわかりにくい商品が多い。英語での対応に苦慮しているが、現在は、同じビルに入居している秋田県国際交流協会からの援助や、翻訳タブレットを使って、英語でのコミュニケーションを進めている。

クルーズ客は、チョコレートやお菓子、

表24　秋田市内商業施設の概要

	主な取扱商品	アクセス
秋田市民市場	鮮魚、塩物、乾物、野菜、果物、衣料品、雑貨、酒など。 テナントとして、コンビニエンスストア、回転寿司店などの飲食店、百円ショップなどが入居	秋田駅から徒歩３分
秋田県産品プラザ	清酒、漬物、米、稲庭うどんなど本県の特産品をはじめとする県産飲食料品のほか、工芸品、民芸品	秋田駅から徒歩５分 アトリオンビル地下１階、１階には秋田市立千秋美術館が入居

樺細工の小物など、細かいものを購入するとしている。漆器などの高額商品が売れる頻度はとても低く、日本らしい、もしくは「秋田らしい」物よりも、「ジャパン・クオリティ」を求めているようで、伝統的な図柄のパッケージを使ったものよりも、キャラクター物が売れるという。また、アルコールの船内持ち込みが制限されていることもあり清酒は売れず、秋田名物「いぶりがっこ」もほとんど購入されない。

土産物として比較的買いやすいお菓子の製造業者は小規模経営が多く、製造者側が「外国人に売れるはずがない」として積極的に外国人向けの商品の開発等に取り組まないケースがほとんどだ。だが、その中でも例外があり、味噌・醤油の発酵商品を作る老舗企業の一つは、フランスのチョコレート店とコラボレーションして、外国人にも評価される商品を作っている。これを特殊な事例とせずに、このような成功事例が拡大すると、県内の菓子製造業の人たちも刺激されるのでは、としている。

すでに、免税手続きが可能で、「きりたんぽの試食会」、「蔵元を招いての試飲会」を催すなど、外国人向けの対応を進めている。また、秋田竿燈まつりの際は、店舗前の空きスペースにベンチを出すなど工夫もしているが、これまであまり外国人が訪れておらず、改善してゆく機運は高いものの、早急な対応に繋がっていない。Wi-Fiの設置、英語での表記や外国人向け商品の開発、休憩を希望する人たち向けのスペースの設置や、店内で購入した食べ物を飲食できるようにするなど、今後の取り組む課題は多い。

3-4．その他

a）JR東日本秋田支社

JR東日本秋田支社にとっては、クルーズ船への期待は高い。本調査では、訪日クルーズ客に焦点を当てているが、秋田港に立ち寄るのは日本人ばかりを乗せた船もある。日本人クルーズ客へは外国人クルーズ客とは異なった対応が必要だが、日本人客向けの商品やサービスの成功は、外国人客への応用も可能なこともあり、同社では様々な取組みをしている。

まず最も大きな投資は、秋田港のクルーズターミナル近くに新たに秋田港駅（プラットホームや冷房とWi-Fiのある待合室）を設置し、クルーズ列車を2018年度から本格的に運行したことだ。秋田港駅は、クルーズターミナルから約500メートルだが、列車の発着に合わせて無料のシャトルバスを運行している。クルーズターミナルと秋田市街地を結ぶのは、タクシーやクルーズ船の運営会社が独自に手配するシャトルバスがあり、無料で運行することもあるが、大抵は1日乗り放題で有料だ。

クルーズ列車の運行は、主として船の総乗客定員数や滞在時間、オプショナルツアー、乗客の消費行動などを勘案して決められる。クルーズ船の大型化に合わせてクルーズターミナルも大きくなっており、乗客の定員数が2千人を超えると、

秋田港においてはシャトルバスだけでは迅速に対応できず、大量輸送のできる列車での移動は秋田港の魅力となる。さらに、列車を利用して角館、白神山地方面などに行くオプショナルツアーでは、秋田港駅で発着でき便利だ。また、クルーズ列車は、クルーズ客のみが乗車できるため、これも秋田港の独特なアトラクションともいえよう。加えて、秋田駅から市街地に行く際、駅ビルの店舗前や商店街を歩くため、地域に及ぼす経済効果は広がる可能性が高い。余談になるが、日本人のクルーズ客向けに新たに作った、秋田市街地内の代表的な観光商業施設6か所(千秋公園、佐竹史料館、ねぶり流し館、市民市場等)を巡るスタンプラリーは、秋田犬など秋田名物をあしらったオリジナルグッズを賞品としたこともあり、とても好評で、クルーズ客の市内の周遊に役立ったようだ。このような企画は、今後、外国人のクルーズ客にも試されるといいだろう。

さて、秋田竿燈まつり中の8月6日は、上り5本、下り7本の運行で、プラットホームで「なまはげ」などの出迎えやお見送り等の特別なサービスをしていることもあり、乗客の満足度は高いようだが、満員には程遠い印象だった。これは、クルーズ列車は2017年度に試験運行され、2018年度から本格運行となったので、「クルーズ列車の知名度が低い」ことが最大の要因のようだ。乗客からのコメントにもあったが、普段は開業していない「秋田港駅」はグーグルマップにもまだ掲載がなく、クルーズ列車についての英語でのインターネット上の情報もないので、事前に下調べしたとしてもクルーズ列車の情報を得ることは難しい。さらに、クルーズ船の運営会社にとっては自社の運営するシャトルバスのチケットの販売が優先なので、船内でJRのクルーズ列車のPRは原則できない。ただ、JRの列車を使ったオプショナルツアーの船内販売が可能な時や前の寄港地でPRができると、クルーズ列車の乗客数は伸びている。クルーズ列車の運行はまだ始まったばかりなので、今後は、英語でのPRをさらに充実させることが課題だろう(表25参照)。

b）通訳/観光案内所(クルーズターミナル)

秋田県からの委託で、秋田港クルーズ

表25　その他への聞き取り調査の結果

	クルーズ客への新規の対応	今後の課題
JR東日本秋田支社	クルーズ列車の運行 インターネット上での情報提供 前寄港地や船内でのPR(可能な場合のみ)	クルーズ列車の認知度の向上 利用者の拡大
通訳／観光案内所	単なる「通訳」から「コンシェルジュ」機能へと変化しつつある	長期継続の契約を希望 「見る」が終焉しつつあり、「体験」商品の開発の必要性
着物レディース (クルーズ船ファンクラブ)	クルーズ船の秋田港への寄港増加により活動開始	完全無償ボランティアのため個人負担が多く、継続の動機付けと資金づくりの必要性

ターミナルに設置された観光案内所にて、主にオプショナルツアーを予約していないフリーのクルーズ客向けに県内の観光情報を提供している。2017年度から継続して同じグループが担当し、1～5人で対応している。クルーズ客は、夏休みの家族連れ以外は年配者が多く、車いすの客もいるが、山歩きをするなど活動的な乗客ばかりの船もあり、その時々により乗客の特徴や行動は異なるとしている。フリー行動のクルーズ客は、夫々の興味関心は全く異なり、その希望に合わせて、秋田県の自然、美術、歴史、移動方法などについての質問をする。英語の話せる「観光案内所」なので、美術館等の開館時間、秋田駅からの新幹線など列車の発車時刻等、細かく正確な観光資料を独自に作成し、必要な情報を手早く渡せるように工夫を重ねている。

秋田港で下船してからの情報発信機能に好意的な声が多いことを前述した(第2節7項)が、この通訳グループの果たしている役割も大きいだろう。通訳たちは、クルーズ客に直接応対している中から、ニーズを的確に把握し、時間をかけて下準備し、単に通訳機能ではなく、「コンシェルジュ」として、一組一組のクルーズ客の旅を「一緒に作る」アプローチをとっている。時には、クルーズ客の要望を聞いて、タクシーの運転手に、行き先、食事の希望、帰港時間、値段などを交渉して、港から送り出すこともあるという。クルーズ客は、「秋田県では、港でも、駅(観光案内所)でも、市街地のシャトルバスの発着するホテルでも」英語がスムーズに通じたことで、非常に好印象を抱き、お礼を伝えて秋田県を去るようだ。

また、様々な秋田県の土産物を売っているターミナル内でのクルーズ客の行動を見ていると、外国人はほとんど買い物せず、せいぜいマグネットや絵葉書を希望するとのことだ。これは、秋田県産品プラザと同じ観察だ。外国人(欧米)は周囲の人に配るために土産を買う習慣がなく、期待するほどの消費に繋がっていない。また、販売している商品には全く英語の表示がないので、中身がわからないことも一因かもしれない。しかし、試食を出している店や、「ハロー」と笑顔で接する店は、それなりに売れているというので、売る側の工夫次第で売り上げも伸びるだろう。

最後に興味深いコメントとして、秋田県の認知度が徐々に上がっているように感じられ、また秋田県へのリピーターもクルーズ客の中にいるし、また来たいとする人も多いとしている。今後の課題は、そういったリピーターへの「次の旅の提案」や「モノが売れないので、『体験』を売ることを考えては」としている。

c）着物レディース(クルーズ船ファンクラブ)

秋田市にはクルーズ船に関わるボランティアグループは3つあり、そのうちの1つが、クルーズ船ファンクラブで、2019年度から和服を着てクルーズターミナルでクルーズ客を出迎える活動を始めた。

季節によっては、千秋公園での花見を案内したり、店先で秋田県の特産品を手に取りながらその良さを伝えたり、ターミナル内でのんびり過ごしている客に声をかけたり、最後に、クルーズ船が秋田港を出航する際は見送りをしたりと、外国人客と地元の人とのふれあいの機会を演出している。すべて無償ボランティアで、「母から譲り受けた」、「嫁入りの時に渡された」着物など、夫々私的な意味を持つ和服を身につけ、それも外国人との会話の一つの種になる。「秋田県で楽しんでもらいたい」、そして「自分たちも大切な着物を着る機会で、楽しい時間を過ごしたい」という思いが活動に繋がっている。

着物レディースは大変好評で、一緒に写真を撮れるし、英語の堪能な人もいるので会話もそれなりに楽しめる。このような「地元の人とのふれあい」は、他の港ではあまりないようで、秋田県の評価の高さの一つの要因となっているようだ。ターミナルでの様子を見ていると、気さくにクルーズ客に声をかけ会話を楽しんでいる。

2019年に活動を始めたばかりで、会員のモチベーションはまだ高いが、今のような活動を継続することは難しいと感じているとしている。現在、秋田では「クルーズ船」はまだ珍しいが、クルーズ船が「当たり前」になると、長く活動を持続するには工夫が必要だろう。まずは会員の負担の軽減が課題だ。朝8時に接岸することの多いクルーズターミナルでの出迎えには早朝からの準備が必要だし、出航までクルーズターミナルなどで過ごすということはかなりの長時間の拘束になる。また、完全無償のボランティアなので、今後は補助金や資金集めも必要だろう。

その一方で、クルーズ客の、街中やクルーズターミナルでの様子をつぶさに見る中からの提案もある。秋田市内の商店が英語表記や外国人向けの新商品の開発などに積極的ではないのは、「来るか来ないかわからないクルーズ客」に対応するにはコストがかかり、リスクが高すぎると感じているように見受けられる。リスクを背負わずに改善できることを、同クラブが提案できたら、と思案している。また、車いすのクルーズ客が市内観光で不便なことを観察し、「車いすにやさしい秋田」づくりを提案している。

4．考察

4-1．調査成果について

本調査の実施は多くの制約があり、標本数も比較的少なく、統計結果に多少の誤差が含まれることを勘案しても、2019年夏に秋田県を訪れた外国人クルーズ客は非常に良い印象を抱いたといえよう。その一方で、消費額の低さなど、様々な課題も浮き彫りになった。

夏は家族連れや若い人が多いが、通年でみると来秋するのは比較的年配の人が多く、船によって異なったクルーズ客の需要を知ることも大切だろう。また、クルーズ客の多くは北米からの客で、それ

に加えて、オーストラリアとニュージーランド、そしてヨーロッパが大半を占め、香港と台湾やタイなどアジアからも少数ながら来ていることがわかった。また、ほとんどのクルーズ客がクルーズ経験者で、秋田県への再訪意欲も高いことが判明したので、春や秋など異なる季節に再び来秋する可能性も高い。通訳からの聞き取り調査にもあったが、「秋田リピーター」が増加しており、このグループ向けのサービスや商品を提供してゆく必要もあろう。これまで秋田県に来ていた外国人旅行者のほとんどはアジア系なので、現在来ている外国人クルーズ客は秋田県にとって新しい顧客層とも言えよう。

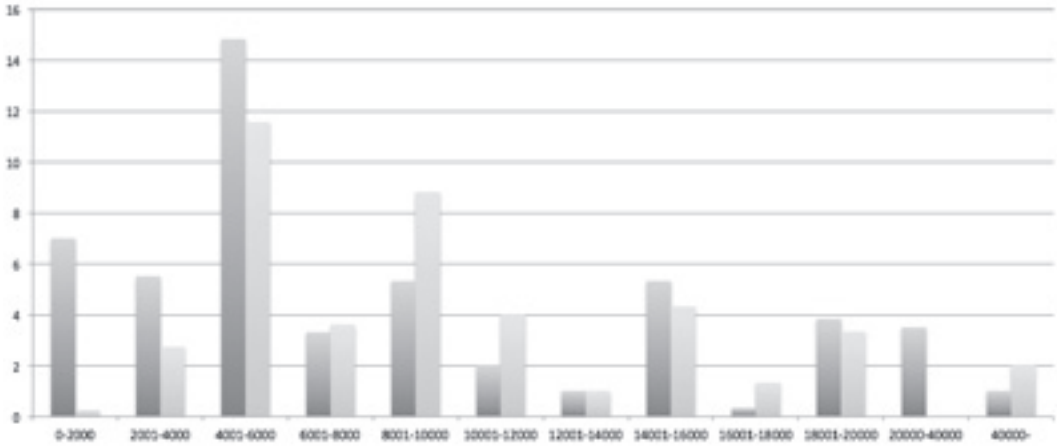
クルーズ客の消費額は属性でも異なった結果が現れたが、最も影響が強いのは秋田港での船の滞在時間だ。クルーズ船が、なるべく長く滞在するような交渉も今後必要となるだろう。滞在時間が長ければ、秋田市外へクルーズ客は旅し、県の広域に経済効果が広がる。クルーズ客の高い満足度を維持するためにも、秋田県が提供する観光の魅力も磨き上げる必要もある。

クルーズ客の県内での消費額は比較的少なく、秋田県の経済活性化に繋がる消費の拡大は今回の調査からはすぐには期待できなさそうだが、高額を使う客もいることが判明した。今後は、商店や飲食店の工夫が必要なことも明らかとなった。多くのクルーズ客が英語表記の充実を望んでおり、土産物の英語説明や英語メニューの増加、外国人用の新商品開発は、消費の増加に繋がる可能性も高い。聞き取り調査からも多くの観光関連施設でも英語対応の必要性が感じられているので、それが実践されることが望まれる。

県内の観光情報は事前にはあまり知られていないようで、ターミナルでの情報提供が最も有用とされた。同時に、インターネット上の英語での情報の拡充も必要だ。さらに、Wi-Fiの充実とコーヒーショップや飲料の自動販売機のほか、高齢の人たちなどが休息できるベンチの地図や、行き方「ルート」を含んだ「外せない秋田県トップ観光地」の地図、地元の交通機関も使いこなせるリピーター向けに交通費等の情報も含んだ「リピーター用観光マップ」などを港の観光案内所等で渡すのも有用だろう。「モノ」の消費の大きな伸びは期待できないが、「コト・体験」の消費が伸びる可能性があり、川連漆器や能代春慶、生駒塗など秋田県独自の塗り物や秋田銀線細工、大館曲げわっぱ、樺細工、イタヤ細工、こけしなどの伝統工芸やガラスの手作りのワークショップなど、受け入れ側のリスクを抑えながらも、新しい商品の開発が望まれる。

4-2．観光消費額についての過去の調査との比較

2017年10月15日に実施した、クルーズ船乗客を対象にしたアンケート調査では、平均観光消費額が女性9,395円、男性13,284円、全体では10,994円となった（図4、根岸・平成29年度JR東日本寄附講



（根岸・平成29年度JR東日本寄附講座受講生 2018より転載）

図４　男女ごとにみる観光消費額の度数分布の違い(濃色：女性、淡色：男性)

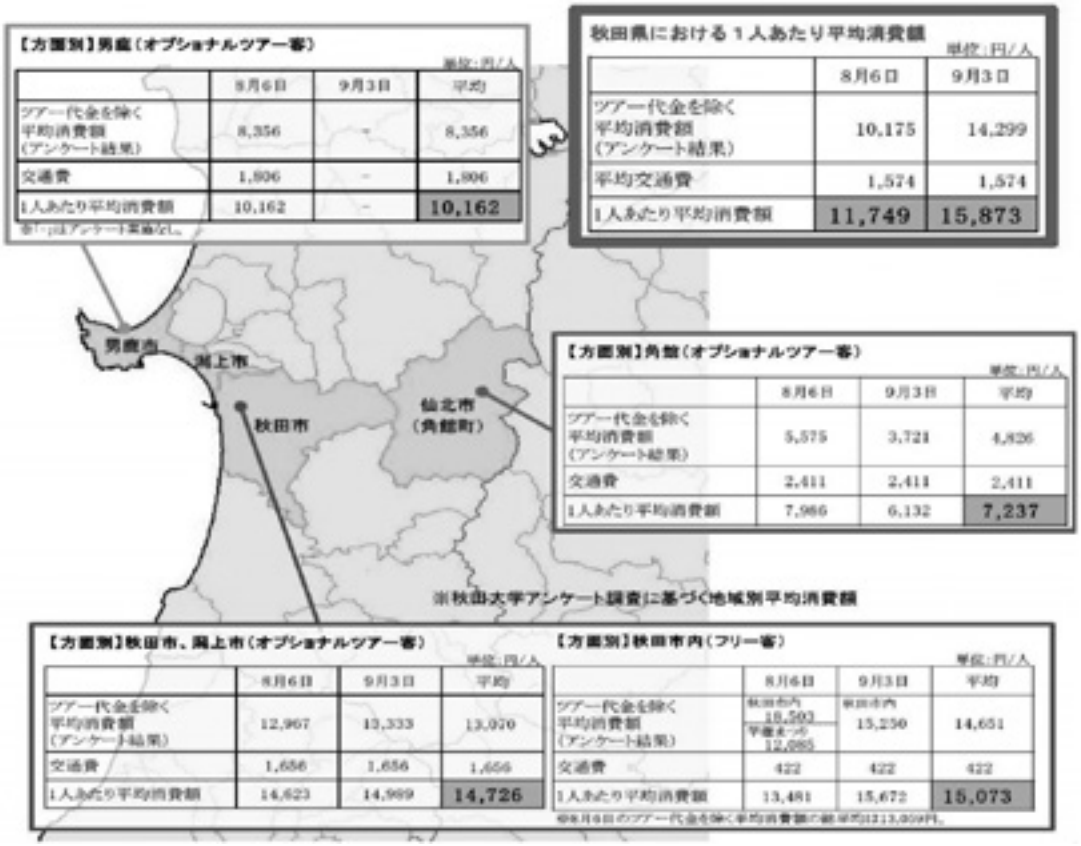


図５　秋田大学による2017年アンケート調査成果

座受講生 2018)。中央値は算出していないものの、男性・女性共に4,000 ～ 6,000円代が多くを占めており、今回の調査(表16)と一致している。2017年の平均観光消費額を押し上げた要因としては、秋田市から仙北市角館までの新幹線(往復約6,000円)や、バスやタクシーなどによるオプショナルツアー料金が考えられる。今回の調査における「交通費」にこれらが含まれていないと思われるが、これは秋田市内で開催される「秋田竿燈まつり」が主な寄港目的であったためであろう。桜や紅葉の季節に実施すれば違った結果が得られた可能性がある。

他方、2017年8月6日・9月3日に行われた秋田大学によるクルーズ船乗客を対象にしたアンケート調査[2)]では、オプショナルツアー料金を除く平均観光消費額が11,749円(8月6日)・15,873円(9月3日)と報告されている(図5)。この調査は秋田市内のみならず、男鹿市・潟上市・仙北市でも実施されているが、その中でも秋田市内の観光消費額の高さが平均額を押し上げた結果となっている。今回の調査結果と比較すると、交通費の低さでは一致しているものの、一般的な観光消費額で大きく異なっていると言える。両調査は共に8月6日にダイヤモンド号の乗客を対象に行われており、かつ秋田大学の調査の詳細が不明であるため、この違いが生まれた要因については不明と言わざるを得ない。

県内観光消費額への期待によってクルーズ船誘致が進められてきた経緯があることから、それがどのように見積もられるにせよ、消費項目を細かくみる分析観点が必要であると考えられる。

4-3．今後の方向性

今後、日本リピーターや秋田リピーターのクルーズ客が増加することが予想され、それに従って地域内の公共交通機関の利用も高まり、フリーのクルーズ客の行動範囲も広がる可能性もある。また、秋田県には中国などアジア発のクルーズ船があまり来ていないが、アジア人の有給休暇が長くなるなど、状況が変われば、中長期的に、これまでとは異なったクルーズ客を乗せた船が来航する可能性もある。また、秋田空港発着のフライ＆クルーズを誘致できると、秋田県により大きな経済効果ももたらされよう。クルーズ客の需要はクルーズ客の属性によって異なるので、継続的な調査を実施し、クルーズ客に見合ったサービスと商品を提供できると理想的だろう。

5．終わりに

クルーズ船は、外国からの観光客が到着する国際空港から遠くに位置する秋田県に、多くの外国人旅行者もたらしてくれる好機とも言える。高齢化と人口減少が著しい秋田県にとって、訪日旅行者の増加は経済活性化の一つになりうる可能性を秘めている。クルーズ船は、地域の観光施設の人たちによると「予想以上」の

外国人を市街や観光関連施設にもたらし、少ないもののそれなりの経済効果もあり、クルーズ客も県内観光関連業者も住民も、「クルーズ観光」に肯定的で、今後の成長が期待されている。

冬の寒さの厳しい秋田県へのクルーズ船は、春から晩秋のみ運行され、消費額もあまり高くないので、クルーズに期待しすぎず、地域の合意に基づいた秋田県ならではの「クルーズ観光」の開発が望まれる。高齢化の進む秋田県と高齢者の多いクルーズ客が、秋田県の港を接点とし、両者の満足度が高く、秋田県の長期的活性化に繋がるクルーズ観光にするには、多くの関連団体、地域住民らも含んだ協調・協働が欠かせない。

謝辞

本稿は、2019年度に国際教養大学アジア地域研究連携機構の客員研究員を務めた村山(英国レディング大学)を研究代表として、秋田経済研究所と連携して実施した3機関による共同研究の成果報告である。国際教養大学アジア地域研究連携機構長の豊田哲也教授、そして調査にご協力いただいた以下の諸機関に心より感謝申し上げる(五十音順)。

秋田県建設部港湾空港課、秋田市立佐竹史料館、秋田市立赤れんが郷土館、秋田市民俗芸能伝承館、秋田市民市場、株式会社秋田県物産振興会、株式会社せん、東日本旅客鉄道株式会社秋田支社

注

1）ピアソン・カイ二乗検定、もしくはノン・パラメトリック検定(マンホィットニーのU検定、クラスカル・ウォリス検定)を使用した。

2）2018年3月29日に開催された「平成29年度あきたクルーズ振興協議会総会」における秋田大学(当時)の萩原史朗氏による口頭発表による。発表の詳細やスライド資料は萩原氏のブログ(http://blog.livedoor.jp/shiro_hagihara/archives/8095600.html)から入手可能である。

参考文献

気象庁 2019「各種データ・資料　秋田1時間毎の値」(https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/hourly_s1.php?prec_no=32&block_no=47582&year=2019&month=8&day=6&view=,2019年9月24日閲覧)

日本気象協会 2019a「秋田県のアメダス実況(気温)2019年8月6日」(https://tenki.jp/past/2019/08/06/amedas/2/8/, 2019年9月24日閲覧)

日本気象協会 2019b「秋田県のアメダス実況(気温)2019年8月24日」(https://tenki.jp/past/2019/08/06/amedas/2/8/, 2019　年9月24日閲覧)

Negishi,Y 2019 *Historical Walk in Akita City: A Self-guided Tour around Senshu Park and Stories of a Samurai family.* Institute for Asian Studies and Regional Collaboration (IASRC), Akita International University

根岸　洋・平成29年度JR東日本寄附講座受講生 2018「クルーズ船外国人乗客に関する

フィールド調査」『文化遺産研究報告第3号』国際教養大学アジア地域研究連携機構研究報告書第4集,29-38頁

村山めい子 2020「秋田のクルーズ観光の持続的な発展へ」『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』第11号、1-24頁

U.S. BUREAU OF LABOR STATISTICS 2019 National Occupational Employment and Wage Estimates（https://www.bls.gov/oes/2019/may/oes_nat.htm,2020年1月6日閲覧）

岸壁では「なまはげ太鼓」の演舞で歓迎

クルーズ客の質問に対応する通訳/観光案内所

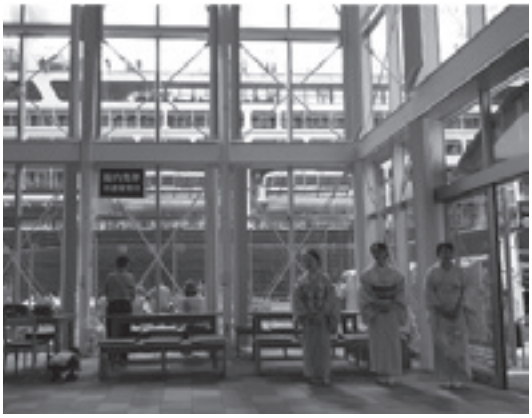
クルーズターミナルで秋田犬と触れ合う

ずらりと並んで待機するツアーバス

秋田港駅に到着する「あきたクルーズ号」

仲小路商店街で買い物するクルーズ客

秋田駅では駅員となまはげがお見送り



クルーズターミナルで見送る「着物レディース」

国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要第12号 pp. 35-52（2021）

秋田蘭画：眼鏡絵と風景図

阿　部　邦　子

要旨

秋田蘭画は18世紀の洋風画で武人画であり、その厳格な作風は、当時流行した西洋の透視遠近法を取り入れ、更にレンズで覗き見る眼鏡絵とは一線を画していると見られがちだが、風景図の主題や構成に関しては、近似点がみられる。特に主題は、浮世絵版画で盛んにとりあげられた江戸や江戸近郊の景勝地に取材しており、文学的発想とも不可分である。この論稿では近年千秋美術館収蔵となった秋田蘭画の眼鏡絵作品を通して、江戸洋風画の原点となっている秋田蘭画に於ける風景図と、眼鏡絵との関係についての調査研究結果を述べる。

キーワード：18世紀日本美術、秋田蘭画、透視遠近法、眼鏡絵

Akita Ranga: *Megane-e* and Landscape Paintings

ABE Kuniko

Abstract

The 18th century Western-influenced Samurai paintings from the Akita Ranga school, with its rigorous style, are not largely recognized as associated with *Megane-e* paintings, which are optic pictures designed using perspectives and are viewed through a lens. However the landscape paintings of the Akita Ranga school demonstrate a *Megane-e* like spatial organization and similar literary ideas and inspirations for their subject matter, such as the famous sites of Edo and its outskirts. This study aims to investigate the Akita Ranga school's landscape paintings, which marked the establishment of the Edo school, and the relationship of the Akita Ranga school to *Megane-e*, by examining the recent acquisition of Akita Ranga's *Megane-e* series by the Akita Senshu Museum of Art.

Keywords: 18th century Japanese Art, Akita Ranga, perspective, *Megane-e*

Ⅰ．はじめに

秋田市立千秋美術館の前身は1958年に開館となった所蔵品を持たない秋田市美術館であったが、個人収集家から秋田蘭画の実作品[1)]等の寄贈を受け、それを核に都市型美術館・秋田市立千秋美術館として1989年に再出発した。その後も積極的に秋田蘭画及び同時代の関連作品や資料の収集を進め、量質ともその豊かさを誇

るまでになった。片や『不忍池図』を代表として重要文化財に指定されている秋田蘭画作品群を所蔵し、その重要さで筆頭とされるが秋田県立近代美術館だ。この秋田県内の二つの美術館が秋田蘭画所蔵の双璧である。国内外の秋田蘭画研究者及び愛好家が必ず訪れる。

一昨年ころから秋田蘭画が一体どのようなものか海外の日本文化に詳しい研究者また本学への留学生に聞くと、次のようなきちんとした答えが返ってくるようになった。秋田蘭画は、18世紀後半の江戸中期に秋田藩主佐竹義敦(号・曙山)と最重要画家である藩士小田野直武を中核として作られた洋風画で、西洋、中国からの影響を受け合理的また写実的な表現で、日本の絵画史上の近代を代表している。また親日家、知日家の間でもここ数年知名度が増してきていると実感する。国内外の「秋田蘭画」研究者の地道な努力を重ねての出版、海外での継続的口頭発表の成果がようやく僅かながら表れてきたものと思われる。みちのくを暗喩した「辺境」といったレトリックを使用すると、「いや、秋田は資源も文化も非常に豊かであって、地理的に不利という論はあたらない」と反論される。だが、「秋田蘭画」はもうとっくに知っているという専門家また秋田贔屓の知識人の中にも、秋田蘭画に眼鏡絵(めがねえ)があるということまでは良く知られていない。眼鏡絵の元祖はヨーロッパで誕生した透視遠近法を入れたパースペクティヴ画である。左右反転の画はヴュ・ドプティックの名前で知られ、日本語訳は眼鏡絵となった。

2019年に個人蔵の秋田蘭画の眼鏡絵シリーズが秋田市立千秋美術館へ寄贈され、公共の機関での研究調査が可能となった。これらの作品群は小田野直武筆とみなされる5点の肉筆の紙本眼鏡絵である。眼鏡絵は通常落款はないので、これらの絵にも直武の署名や印章はない。しかし、故成瀬不二雄氏の研究結果により、作風から小田野直武の作品と推定される。今回筆者は秋田県文化芸術遺産持続的活性化を目指し継続する「世界の中の秋田蘭画」研究プロジェクトの一環として、秋田蘭画の眼鏡絵と風景図に焦点を当て調査研究を行った。この拙稿は、秋田蘭画の風景図と透視遠近法、そして浮絵、レンズを必要とする眼鏡絵との関係を、美術史学、また視覚文化史学の観点から探った最新調査研究結果の発表である。

Ⅱ．秋田蘭画と眼鏡絵

一般的に、江戸時代の洋風画である秋田蘭画は「花鳥風景画」と称される鑑賞画が代表的とされるが、秋田蘭画の最重要画家小田野直武は実は西洋画法をもちいた実写的な日本風景図も制作した。これら風景図には眼鏡絵に属するものがある。調査により、今日の所在が確かな9点の肉筆紙本着色眼鏡絵が確認された。眼鏡絵は浮絵の一種であるが、簡単にいうと眼鏡(レンズ)という機械(からくり)を用いて覗くことにより、遠近法がより強調され、奥行きが深くなるように制作され

たものである。江戸時代の鈴木晴信画浮世絵版画(図１)からレンズの一種の反射式覗き眼鏡を通して床に置かれた眼鏡絵の山水図を覗く様子がわかる。タイモン・スクリーチ氏と共に江戸時代のレンズやガラス、眼鏡、望遠鏡による視覚革命を説く田中優子氏によると、舶載の光学機器である「からくり」は、ありとあらゆる出版物と結びつき人々をあっと驚かせ「新しい視覚」文化を展開させた(田中2014：8-13)。眼鏡絵の例のように、一種玩具(おもちゃ)の範疇に入るレンズ機器を通して覗き見る景色や光景に驚きを求める文化は好奇心からフィーバーとなっていったのである。

このような大衆文化を巻き込んだ視覚革命の中で誕生したのが、秋田蘭画の小田野直武の眼鏡絵である。しかし、作風そのものは武人画として厳格であり、基本的に実写によると思われる眼鏡絵の風景図にはこの大衆の遊びの部分に迎合するようなものは見られない。秋田蘭画の小田野直武筆と推定される今日千秋美術館蔵となった肉筆紙本着色眼鏡絵の作品群は以下5点である。

「梅屋敷」(32.8 × 50.3㎝)(図２)
「東叡山寛永寺」(33.1 × 51.1㎝)(図３)
「新川酒造」(32.9 × 50.7㎝)(図４)
「高輪海景」(32.9 × 51.1㎝)(図５)
「品川沖夜釣」(33.1 × 50.7㎝)(図６)

いずれも主題は、当時の景勝地として浮世絵版画にも盛んに取り上げられた江戸名所に取材している。「梅屋敷」は亀戸天神近くの梅の名所清香庵で、古木の「臥龍梅」で知られる。「東叡山寛永寺」は上野の寛永寺、「新川酒造」は運河沿いの酒問屋である。「高輪海景」は富士が見える位置としてむしろ「芝浦海景」の方が妥当かもしれない。「品川沖夜釣」は題名では品川とされているが、篝火から佃島の夜釣りの白魚漁であろう。

この5点はかなり大判の眼鏡絵である。縦横の寸法[2)]はわずか数ミリの違いがあるだけであることから、一組と判断する。これらは故渡辺紳一郎氏(1900 – 1978)が蒐集した肉筆眼鏡絵で、神奈川県立近代美術館(1976)また北海道立近代美術館(1978)の「渡辺紳一郎氏コレクション　江戸の泥絵展」で紹介された。その後は、神戸市立博物館・たばこと塩の博物館で「栄光のオランダ絵画と日本」展(1993)、また神戸市立博物館・町田市立国際版画美術館の「司馬江漢百科事展」(1996)で展示された。秋田蘭画の作品としては主に「秋田市立千秋美術館開館5周年記念　洋風画の系譜展」(1994)、同じく千秋美術館での「秋田蘭画とその時代展」(2007)、また最近ではサントリー美術館での「小田野直武と秋田蘭画－世界に挑んだ7年」展(2016)で展示され、それぞれの図録におさめられている。

上記5点の肉筆眼鏡絵作品の他に、落款は無いが小田野直武作と推定されている以下4点の肉筆紙本着色眼鏡絵がある。主題は全て上記5点と同様、江戸もしくは近郊の名所絵である。

「江の島図」(29.8 × 50.0㎝)大和文華館蔵
「三つまたの景」(24.6 × 37.8㎝)天理大学附属天理図書館蔵(図７)
「不忍之池図」(24.7 × 37.9㎝)歸空庵蔵
「梅屋敷」(23.9 × 38.2㎝)歸空庵蔵

最後の歸空庵蔵「梅屋敷」(以下「歸空庵本」)は今日秋田市立千秋美術館収蔵になった旧渡辺コレクションの「梅屋敷」(以下「旧渡辺本」)の絵と微妙な差があるものの殆ど同一と言えるほど酷似している。ただ「歸空庵本」(23.9 × 38.2㎝)は「旧渡辺本」(33.5 × 50.3㎝)に比べ寸法がかなり小さく、「歸空庵本」は上下左右が切断されたような構図となっている。この点から今橋理子氏の説のように、「歸空庵本」と「旧渡辺本」は同じ下図から制作され、大きさの異なるものが制作されたと推測される(今橋2009：234)。このように寸法から推定すると、「歸空庵本」の「梅屋敷」は、上記の他の眼鏡絵二点「不忍之池図」と「三つまたの景」と同様の寸法なので、一つの組として制作されたと仮定したい。

「三つまたの景」は、黒田源次氏が「秋田系洋画管見」(黒田1947：41)の中で語っている黒田氏所蔵の5点一組の無款の秋田蘭画の眼鏡絵シリーズの一点と推定される。5点の画題は「不忍池、大川端、金澤八景、臥龍梅、夜釣」で、そのうちの「夜釣は深川白魚漁の場面で、曙山公の写生帖の図にある海岸の図に近い」[3)]としている。この中で黒田氏が呼ぶ「臥龍梅」は「梅屋敷」であろう。また「大川端」は旧黒田蔵の眼鏡絵「三つまたの景」で間違いない。黒田氏の文章の中には寸法が記載されておらず、慎重さが必要だが、旧黒田蔵の「三つまたの景」の寸法から、黒田氏が当時所蔵していたという一組の眼鏡絵の寸法は凡そ(24.6 × 37.8㎝)であろうと推測される。

かたや上述の眼鏡絵の大和文華館蔵「江の島図」であるが、旧渡辺紳一郎コレクションで今日秋田市立千秋美術館所蔵の大判の眼鏡絵シリーズと比較すると横幅寸法は同じだが、縦の寸法が短く、後の所有者が切断したものでないかぎり、別扱いとなる。このように、寸法から判断すると計三組の眼鏡絵シリーズに分別できる。これらの作品群は、直武が実写に基づいて複数組の眼鏡絵制作に積極的に従事したと考えるのに充分な証拠と言える。

直武は眼鏡絵制作と共に対応する絹本を描いていた可能性が大きい。上記旧黒田蔵肉筆紙本眼鏡絵「三つまたの景」に対して同じく旧黒田蔵で現在天理大学附属図書館蔵の無款の絹本「三つまたの景」[4)](図８)(43.5 × 76.5)、そして更に明治24年(1891年)の展示以降所在不明となっている「三俣真景」[5)]の存在が知られる。また上記肉筆紙本眼鏡絵「不忍池図」に対して、秋田県立近代美術館蔵重要文化財の絹本「不忍池図」(96.5 × 132.5)(写真９)がある。眼鏡絵は、実景の右と左が逆になるように最初から制作され、反射式の覗き眼鏡を通して見ることにより、左右が初めて反転され、正しい方向の画面とし

て鑑賞される。よって上述の直武筆の絹本は、左右が反転している紙本眼鏡絵と比較すると判るが、実際の風景と同じく、正方向で制作されている。

Ⅲ．浮絵と眼鏡絵

ここで秋田蘭画の画家小田野直武が本格的に制作したと推察される眼鏡絵とはいったい何かについて述べたい。眼鏡絵は、日本で独自の発展を遂げた浮絵(うきえ)から派生したものとみられ、浮絵の範疇に含まれている。双方とも西洋風遠近法を取り入れた絵であるが、大きな違いは眼鏡絵が凸レンズ入り道具を覗いて鑑賞する小さいサイズの絵で左右反転しているのに対して、浮絵は道具を使用せず鑑賞する絵(多くは版画)で正方向であることである。眼鏡絵と浮き絵に詳しい岡泰正氏の『めがね絵新考　浮世絵師たちがのぞいた西洋』(1992)及び岸文彦氏の『江戸の遠近法　浮絵の視覚』(2004)を参考に時系列から最初に浮絵について述べ、その後に眼鏡絵に関して説明する。

Ⅲ．１浮絵

上述のように眼鏡絵を含んで浮絵と呼んでいるが、その歴史はどのようなものであろうか。浮絵は、1740年代から江戸で流行した。肉筆画と木版画がある。西洋画の透視遠近法を使い、消失点が一点の線遠近法が最も効果的に表現できる室内をとりあげ、特に歌舞伎や狂言の芝居小屋や吉原の遊郭の室内が描かれた。芝居絵では、奥行きや距離感を誇張した芝居小屋の室内構造と、その中で観客や舞台上で演ずる役者の臨場感溢れる描写が見られる。遠景が窪んで見えることから「窪み絵」とも呼ばれたが、一般的には近景が浮いて見えることから「浮絵」と呼ばれた。木版画では江戸の浮世絵師奥村政信(1686-1764)が先ず有名となり、その後、浮世絵師歌川豊春(1735-1814)により、錦絵による出版事業として発展し、大流行となる。

Ⅲ．２眼鏡絵

一方眼鏡絵とは、凸レンズ入りの装置をとおして鑑賞することを目的に、透視遠近法を応用して描かれた絵のことを指す。装置としては、最初に例としてあげた歌川晴信の浮世絵(図１)に見られるが、反射鏡と凸レンズを組み合わせた「覗機械　のぞきからくり」、または凸レンズのみの装置「覗眼鏡　のぞきめがね」がある。一種の高級玩具と位置づけられる。17世紀のヨーロッパでは銅版画の風景画を、装置を通して鑑賞することが流行し、眼鏡絵としての西洋銅版画が中国へ伝わった。その後、西洋の遠近法を取り入れた中国蘇州製眼鏡絵の風景図が、江戸期の後期宝暦頃(18世期中頃)に、長崎の唐館を通してもたらされた。

この中国製眼鏡絵は京都にもたらされる。京都の輸入眼鏡絵を扱う玩具商尾張屋のもとで絵を描いていた当時20歳代の

丸山応挙は、この西洋風遠近法が入りこんだ中国製眼鏡絵を模しながら研究し、京都名所を題材に眼鏡絵を制作する。玩具のような光学機器と附属品の小さなサイズの眼鏡絵は「覗機械」(のぞきからくり)としてセットで販売された。しだいに需要に追い付かなくなり、肉筆画ではなく版画で安く大量に販売された。また、明和初年(1764 − 68)頃になると、中国製ではなく、西洋から舶載された「覗眼鏡」(のぞきめがめ)に附属した銅版眼鏡絵(ヴュー・ドプティック)も京都、大阪、江戸へと導入された。

Ⅳ. 歌川豊春の存在

ここで秋田蘭画の小田野直武の風景図との関係があると推測される、上述の江戸で浮絵出版事業を手掛けた歌川豊春をとりあげたい。出生地、師系、制作年などが不詳で謎が多いが、美術史上では重要な絵師だ。この豊春を祖として豊広、豊国、そしてその系列として広重、国芳と江戸後期を代表する歌川一派の浮世絵師が誕生する。京都で修行し1768年頃(明和5年)に江戸に出てきた豊春は、西洋透視遠近法を入れた新しい江戸の浮絵を売りにだした。このように、明和から安永期までには、浮絵の風景版画において、合理的な空間の把握が既になされていたことになる。この安永期は秋田蘭画の直武の江戸での活動期と全く一致する。

豊春の数多くの浮絵は、初期の制作として、先ず中国楼閣図があげられるが、その後の制作は西洋銅版画を直接模写した透視遠近法を入れた風景図が多い。錦絵で都市景観図のヴェネツィア風景を描いた「浮絵　紅毛フランカイノ湊万里鐘響図」が知られる。原画はイタリアの画家アントニオ・カナレット[6]が描いた、サン・ジェミニアノ教会を背景としたベニスの運河の眺めであるが、豊春が手本にしたのは西洋銅版画版眼鏡絵である(岡 1992：153)。同じように西洋銅版画版眼鏡絵「古代ローマ遺跡」を模した浮絵「阿蘭陀フランスカノ伽藍之図」がある。

もう一つの豊春が西洋銅版画から透視遠近法をいれながら木版画で制作し、錦絵浮絵としたのが「浮絵アルマニア珍薬物集之図」(図10)である。筆者は『解体新書』扉絵を含む舶載銅版画を元にした小田野直武の作品とより多くの接点があると考える。豊春の浮絵の元図はモルッカ諸島で採集された海産無脊椎動物と鉱物の研究報告であるルンフィス著『アンボイナ島奇品集成』(1705年、アムステルダム刊)(図11)の扉絵だ。この扉絵及び全ての挿画が、自然科学者で女流画家でもあったマリア・ジビラ・メ―リアンによるもの[7]と知られている(Sharon Valiant 1993：472)。当時の舶載原書『アンボイナ島奇品集成』は、平賀源内が明和3年(1766)に入手している[8]。この高額な舶載の原書が当時の日本に何冊もあったとは考えにくく、また市井の浮世絵師がこの書を閲覧する機会をたやすく得られるとは思えない。故に歌川豊国は源内のもとに出入りしていたと推定され(内山1993：69)、源内の

サークルの中に歌川豊国が入る可能性が十分考えられる(内田1987：96)。既に黒田源次氏が1923年出版のその著『西洋の影響を受けたる日本画』で歌川豊春に関して次のように記述している。「蘭学者でもなく又洋画家でもない」「一個市井の畫工」の豊春は「源内や前野、杉田、桂田などの蘭学者の事業に早くも共鳴」し「阿蘭陀絵の模写を錦絵に試みた」。「豊春の粉本となった阿蘭陀の原畫を尋ぬることは本より不可能であるがアルメニャ物集圖やフランシスカノ伽藍圖などより推して直接彼が和蘭の本草書や銅版畫を見てこれに好奇の目を瞠つたに違ひなからう」(黒田1923：28)。実際豊春は安永・天明の頃には盛んに舶載銅版画を模した浮絵を描いており、宋紫石、司馬江漢等が出入りした源内の工房で、小田野直武と歌川豊春が源内所蔵の同じ舶載書を目にすることが可能だったのではないかと思われる。

ここで、秋田蘭画とルンフィス著『アンボイナ島奇品集成』の扉絵との接点を探る。この扉絵は、構成上秋田蘭画の最大の画家小田野直武が描いた『解体新書』扉絵(図12)に似る。この直武による扉絵はワルエルダ本と言われるアントワープ刊解剖書の銅版画の扉絵(図13)を元絵としている。同様に豊春はルンフィス著書の銅版画の扉絵を殆どそのまま模写しているが、日本の風景図と合成し紅絵また錦絵の浮絵作品としている。直武作品との関連を考える上で非常に重要な作品と判断する。理由は三つある。

一つはイコノグラフィーの観点からである。この扉絵模写部分にあるロッジアの扉の柱の前に配されているのは男女の立像である。着衣の女性像は城塞の形の冠をいただき、その城塞の扉の鍵をもっているので、城塞のある街または島を象徴する擬人像であろう。男性像は、盛期ルネッサンス最大の彫刻家ミケランジェロの彫像を彷彿とさせるヌードの海神ネプチューンで、イルカのレリーフが見られる台座の上に立つ。歌川豊春作の浮絵の制作年が不明なので、断言はできないが、『解体新書』扉絵のアダムとイヴの姿が日本で初めての西洋人のヌードであると言われてきたが、豊春のこの紅絵また錦絵が日本初のヌード立像の可能性もある。この扉絵の構成、またヌード立像、そしてイルカのモチーフが直武による『解体新書』の扉絵の紋章部分モチーフに似通っている。ヨーロッパの当時の自然科学書の扉絵はだいたい同構成であるとは言え、この要素は注目に値する。

二つ目は元図の建物の後景としてアーチ越しに覗き見られる水景である。豊春の浮絵では左半分を日本の水景とし、その水平線を右側のルンフィス著書扉絵の写しの後景の水平線と結び、遠近法をもって統一空間を作っている。このように豊春は、中景と遠景では西洋図像の空間と和の景色の空間を合成しておりここに豊春独自の創作がある。直武の三幅対「唐太宗・花鳥山水図」(図14)の風景図の合成統一を図る構想との共通点があるのではと思われる。

三つ目は、前景の床で、中国蘇州版画

の中国楼閣の床のタイルと同じ表現を用いて遠近を強調している点である。右半分の元図を写した部分側に消失点を一点設定している。この碁盤張りの床は、上述の直武の三幅対「唐太宗・花鳥山水図」の中幅図の床表現に近似する。この直武の三幅対の絵は中幅に限らず全体の構成要素を精査すると、むしろ奥村政信による横大判紅絵《無題(唐人館之図)》(図15)により多くの接点があるだろう。直武の絵の中幅の人物像の唐太宗、衝立、そして前述の碁盤張りの床、右左の幅の背景のパノラマ景色の処理の仕方はこの政信の紅絵によく似るものがある。政信の紅絵の後景は瀟湘八景のシリーズを一つに合体させたような景色になっている。ただし、政信の後景は俯瞰的な自然景観で、豊春そして直武が描いた水平線は無い。尚、この政信の浮絵の紅絵は蘇州版画の『蓮池亭遊戯図』に似る(岸 1994：9)。

V. 小田野直武と秋田派眼鏡絵

以上のように、眼鏡絵としては上記の丸山応挙を初めとする京都派、浮絵では奥村政信とその後の歌川豊春による江戸派があり、また長崎派が存在する。その中で江戸派と接点のある眼鏡絵の秋田派が位置付けられる。小田野直武による写真のごとき秋田蘭画の江戸名所の風景図は、大名等向けの眼鏡絵の高級品として作られたという。秋田蘭画の小田野直武による眼鏡絵風景図は江戸派の浮絵(眼鏡絵を含む)から題材はもとより構図上も影響を受けたと考えていいだろう。江戸の市中に出回っていた奥村政信や歌川豊春などの大衆的な浮絵を当然目にしていたであろうし、意識はしていたはずだ。

しかし、当然のごとく殆ど全てが版画による浮絵と秋田蘭画の眼鏡絵との違いは大きい。直武の眼鏡絵は肉筆紙本で描かれた。直武の面相筆を使っての非常に繊細な筆致は、描写には技術的な限界のある版画の浮絵を遥かに超え臨場感溢れるものにしている。直武の眼鏡絵には、その空や水景の描写に舶載銅版画のハッチングを直接模した跡がうかがわれる。具体的には今日千秋美術館所蔵の上述した眼鏡絵「高輪海景」、「品川沖夜釣」は直武が所蔵していたオランダの風景画家ファン・ホイエン[9]原画の銅版画「静寂 A Calm」(図16)を模したと見られる部分が複数見つかる。それが故に、精緻な線刻表現には直武筆と判断できる程の統一感があり、直武の画風と言える。この筆致の他、主題構成の観点からも、武人画家直武の作風そのものが厳格である。直武自身が漢画から直ぐ洋画に入り、直接的には大衆的な浮絵に関与しなかったということが理由であろう(成瀬 1995：129)。

それでは一体どういう状況で武人である直武が浮絵、特に眼鏡絵を制作することになったのか。源内のもとで洋風画の修行をしていた直武の実際の制作の内容などを、かいつまんで語った非常に貴重な記録がある。庄内藩医の鳥海玄柳(とりうみ・げんりゅう)(1759-1852)筆の随筆『翁左備』(所在不明)の写し『翁左備抜書・

全』(武塙1994：14)である。その中に「平賀源内小伝」として10ページに及ぶ記述がある。以下その一部を抜粋する。

「(源内が)秋田ヨり帰りに、藩中の二男なる由小田野武助と云人同居に連れ来り。画人ニて、紅毛画上手ニて、浮画、目鏡の絵、紅毛本草の画抜粋に都而蘭画の書人多くなりたるは、此人始め也との浮画書キ、司馬江漢も初め武助に習て名高く一家をなしぬ。武助か事は今ハ覚知りたる人なし。」

庄内藩医鳥海玄柳は源内と親しく、源内宅で実際に見聞きしたことが、晩年になって記憶をたどりながら、記述されたものであるという。直武が源内宅で他の弟子や訪ねてくる蘭癖家と交わりながら制作していた様子、また、「浮画」(浮絵)及び「眼鏡の絵」(眼鏡絵)を制作していたことを知ることができる。最初に紹介した今日千秋美術館所蔵の5点の直武筆とされる肉筆眼鏡絵の中に、「梅屋敷」がある。前述したように、この作品にはもう一枚大きさの異なる直武筆と推察される歸空庵蔵「梅屋敷」があり、屋敷の景観、人物像、建物の細部など、全てにおいて酷似している。これは、源内の工房で、直武が他にも同じように眼鏡絵を複数制作し、器具と一緒に販売していたという上記の言を裏付けるものと言えよう。

Ⅵ. 直武制作絹本風景図

次に、秋田派と呼ばれるこれらの直武による肉筆紙本眼鏡絵と、上述しなかった絹本風景図、及び風景図を後景に配した絵との関連を探る。秋田蘭画の風景図は水景が多く、遠近法が消化され、対象を写実的にとらえて陰影法を取り入れている。主要な直武筆絹本着色風景図として以下の作品群が挙げられる。

「品回帰帆図」(48.5×62.0cm 無款　個人蔵)は品川の海浜から富士山を望む風景で、上述の直武が所持していたファン・ホイエン原図の銅版画の刻線を模した精密な筆致がみられる。低く水平線をとる構図、船が海面に落とす影、海や空の色の描き分けはファン・ホイエンから学んだと思われる。二隻の帆掛け船、二人の男が漕ぐ小舟は、そのままの形で登場し、空には鳶が舞う。天理大学附属図書館蔵の眼鏡絵また絹本の「三つまたの景」の中央遠景にも舟の船頭が船尾で舵の柄を握っている様子が見られる。

一方、直武作「富嶽図」(秋田県立近代美術館蔵)(図17)は、富士山遠望図で、静岡県黄瀬川からみた富士(正うつし)を実景描写したもので(山口1981：35)、人物を配している。直武は遠州相模に旅をし、相模土産を城代に献上したことが知られている。前に触れた唐太宗・花鳥山水図(三幅対　秋田県立近代美術館蔵)(図14)は花鳥山水画で唐の太宗の故事を主題にしている。中幅に太宗の座る姿、左右の幅が供花となっているが、注目するのは

典型的な遠景に銅版画による影響の刻線での描写、前景を拡大させ、水平線を低くおき、遠景を配しているのが注目される。同様に中幅は不在だが、左右の幅が風景図となっている「日本風景図」(三重県　照源寺蔵)が知られている。この風景は、金沢八景と江ノ島の真景に似ると言われ、実写に基づいた真景図であろう(山口 1981)と推察される。

また、絹本ではないが、秋田蘭画風景図として二つの作品、また絹本の制作年が殆ど確定できる風景図一点を付け加えたい。秋田市立千秋美術館所蔵の佐竹曙山写生帖の中にある無款の風景図「帆船が浮かぶ海景図」(図18)と「夕立ノ天」(図19)である。成瀬氏は作風の上で、直武の手による献上絵手本であろうと推測している(成瀬1988：272)。制作年が凡そであるが特定できる絹本一作品は、落款とオランダ語印を冠した曙山筆「湖山風景図」である。曙山の写生帖には、曙山の作画用の舶載銅版画など資料も入っているが、曙山ではなく、直武が所蔵していた舶載銅版画から創意を得た日本風景図となっている。この作品の制作の時期だが、所有者の秋田市立美術館が修復を行った際、学芸員の松尾ゆか氏が発見した旧表装の軸木の墨書に「安永七年戊戌七月　出羽秋田久保田御張付師山本又兵衛拵之」[10]とあり、安永七年七月の直前に描かれたと判明している。この事実から、曙山の「湖山風景図」については、安永7年4月10日に藩主佐竹曙山の命により秋田本城へ引っ越しし、側近となった直武の直接の助言や協力があったものと考えられている(成瀬1988：273；成瀬2004：196)。これは創意の源となった銅版画が直武所蔵のものであったことも裏付けている。よって直武の影響下の曙山筆風景図といえる。

Ⅶ. おわりに

直武の眼鏡絵、風景図はその構成要素を分析すると、実景を写生した上で、その写生に基づき西洋銅版画からの要素を入れるという、ある意味では複合的視点の粉本構成が見られる。絵画的構想図である。ファン・ホイエンに例をとり、似たような帆掛け船、船頭の姿、空を舞う小さな鳶の姿を複数の絵の中に登場させている。また細部の筆致は銅版画にみられる精微な線刻で、水面に映る影の描写なども練達している。実は、直武は江漢と共に銅版画の制作を試みようとしていた。直武は眼鏡絵「不忍池図」制作後の1780年(安永9年)に突然亡くなるが、江漢はその4年後の1784年(天明4年)に直武と同じ構図の眼鏡絵「不忍池図」を腐食銅版画(エッチング)で制作している。直武から洋風画の技術の手ほどきを受けた江漢が、後に日本初の銅版画制作を成したのである。江漢の作品は直武の秋田蘭画の延長線上にあるといっていい。成瀬氏が述べているように、直武の肉筆眼鏡絵「不忍池図」はその筆致が精細で銅版画風であることから、直武が短命でなければ、直武自身が「不忍池図」の銅版画制作を成し遂げていたかもしれない(成瀬

1988：272)。

今回の調査で、錯視を狙った大人の遊びともいえる透視遠近法を盛り込んだ都市景観などのヨーロッパのパースペクティヴ画が中国製を通して日本に伝わり、日本製が制作され、秋田蘭画の小田野直武も関与し、その日本風景図に大きな影響を与えた事実を再確認できた。透視遠近法を入れた小田野直武の眼鏡絵風景図を巡っては、源内との交流があった画家達に多くの接点が見つかった。直武の眼鏡絵風景図は、源内のサークルを通して、作品の主題、作風とも司馬江漢により継承され、より進歩した風景図へと受け継がれていく。このサークルの中に文中で論じた歌川豊春の名前が入る可能性に関しては、さらなる検証が必要ではあるが、イコノグラフィーまた構図の比較検証からまず間違いがないと思われる。その後は、浮絵を多数残した葛飾北斎、歌川広重へと継承されるが、メタモルフォーゼする。脱皮である。そして眼鏡絵としては、流行がすぎ次第に消滅してしまう。

秋田蘭画の眼鏡絵を巡っての歴史を辿ると、透視遠近法を採用し徐々に消化していった直武の水平線を低くおいた風景図は浮絵の奥村政信また歌川豊春などの存在があったからこそ生まれたと言える。同じように秋田蘭画の存在があって始めて、ヨーロッパ美術に一つの革命をもたらした広重の線遠近法と前景拡大の組み合わせによる大胆な構図が生まれたと言える。もちろんルーツを辿ると浮絵に取り入れられた西洋の透視遠近法のパースペクティヴ画、ヴュ・ドプティックの存在がある。視覚文化のリソースの地球規模の移動巡回をあらためて認識する。田中優子氏が唱えるように[11)]、日本文化の歴史も地球の上で考えてからこそ大きな展望と課題を得ることができ、新しい価値の水平線が開けてくると言える。この新しい価値のもとに、秋田県内の全ての美術館総動員の秋田蘭画展を提案するものである。

謝辞

今回の調査では秋田市立千秋美術館学芸員松尾ゆか氏から貴重な情報と助言をいただいた。ここに謝意を表したい。

注

1）『秋田市立千秋美術館所蔵作品選』2001:4

2）作品寸法は秋田千秋美術館収蔵品データベースによる。

3）黒田源次「秋田系洋画管見」『みづゑ』506号1947：41。この5点一組は、司馬江漢が木村兼霞堂に贈ったとされる江漢筆ペン書き長崎図と「志那洋畫」などと一緒に出たもので、黒田氏の推察によると、木村兼霞堂の旧蔵品。

4）旧黒田源次蔵絹本「三つまたの景」は、黒田が滞欧中にベルリンの画商チコチンから購入。その前の所蔵者はパリの日本美術蒐集家ルイ・ゴンス(Louis Gonse 1846-1921)。黒田源次「秋田系洋画管見」『みづゑ』506号　1947：41；小野忠重著「偉大な美術史家の回想」『ビブリア』1967：69.

5）この「三俣真景」の寸法は不詳だが、小田

野直武の落款入り小幅絹本と推定される。「本會記事」『日本美術協会報告』47号(明治24年11月30日付)p1, 7。日美術協会列品館での常会「明治二十四年十月十七日午後1時ヨリ」に日本美術協会員の「益田友雄」が出品した「小田野直武筆三派〔ママ〕眞景一幅」。また「益田友雄君ノ三俣眞景小幅ノ筆者小田〔ママ〕直武ハ傳ヲ詳ニセス畫風ハ司馬江漢亜歐堂ノ流ナル油繪ナリ」とある。次を参照　山本丈志　「小田野直武の洋風画　―落款にみるその成立と制作期間についての考察―」『鹿島美術財団年報』26別冊号、2009：108

6）カナレットは18世紀にベニスの名所絵の普及版ヴェドゥータ(観光都市の景観を忠実に描いた小さなサイズの絵で、当時の絵葉書の役割を果した)を制作。

7）メーリアンの原画水彩画はレニングラードのエルミタージュ美術館所蔵。

8）芳賀徹『平賀源内』2004：312-314。ルンフィウス(Georgius E. Rumphius 1628-1702)著『アンボイナ島奇品集成』(原題D'Amboinsche Rariteitkamer)は源内の「物産書目」では『紅毛介譜石譜附』。原書の図版は江戸時代に画家の曽我二直庵が転写、『阿蘭陀海尽』として収録され、今日国会図書館蔵。『江戸の科学大図鑑』2016：105

9）Jan Van Goyen (1596-1656) オランダの風景画家。ヤン・ファン・ホーイェンとも呼ばれる。平福百穂『日本洋画曙光』(1930)の中にこの銅版画が複写され「第二十八図　小田野直武遺品中の舶載画　其の三」の記。銅版画はアムステルダム国立美術館に「A Calm」というタイトルのオリジナルが所蔵されている

10）成瀬不二雄『佐竹曙山』(2004：196)の中で「御貼付師」の名前が「山本五兵衛」となっているが、これは翻刻の誤りで、正しい名前は「山本又兵衛」である。秋田市立千秋美術館学芸員松尾ゆか氏から2021年1月20日に文書で直接教示をいただいた。

11）田中優子「江戸に開いた〔新しい場所〕」タイモン・スクリーチ著田中優子・高山宏訳『大江戸視覚革命』1999：525-537

図版

図１　鈴木晴信画　六玉川高野の玉川
メトロポリタン美術館

図２　小田野直武画眼鏡絵　梅屋敷
秋田市立千秋美術館

図３　小田野直武画眼鏡絵　東叡山寛永寺
秋田市立千秋美術館

図４　小田野直武画眼鏡絵　新川酒蔵　眼鏡絵
秋田市立千秋美術館

図５　小田野直武画眼鏡絵　高輪海景
秋田市立千秋美術館

図６　小田野直武画眼鏡絵　品川沖夜釣
秋田市立千秋美術館

図７　小田野直武画眼鏡絵　三つまたの景
天理大学附属図書館

図８　小田野直武画絹本　三つまたの景
天理大学附属図書館

図９　小田野直武画　不忍池図
秋田県立近代美術館

図10　歌川豊春画　浮絵アルマニア珍薬物集之図

図11　ルンフィス著　アンボイナ島奇品集成
扉絵

図12　小田野直武画『解体新書』扉絵
国会図書館

図13　ワルエルダ本　解剖書扉絵
秋田市立千秋美術館

図14　小田野直武画　唐太宗　絹本着色
三幅図　秋田県立近代美術館

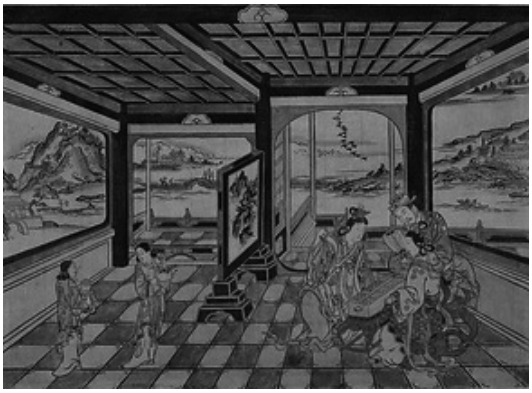


図15　奥村政信画　無題　唐人館之図
大判紅絵

図16 a　海浜風景　ヤン・ホイエン原画
銅版画(旧小田野直武所蔵)
仙北市立角館町平福記念美術館

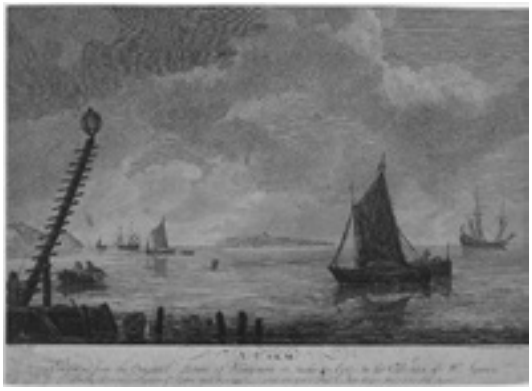


図16 b　A Calm(静寂)　ヤン・ホイエン原画
1759年制作銅版画
アムステルダム国立美術館

図17　小田野直武画　富嶽図
秋田県立近代美術館

図18　「帆船が浮かぶ海景図」佐竹曙山写生帖より
秋田市立千秋美術館

図19　「夕立ノ天」佐竹曙山写生帖より
秋田市立千秋美術館

参考・引用文献

『秋田市立千秋美術館所蔵作品選』, 2001, 秋田市立千秋美術館

『秋田蘭画　－ 憧れの阿蘭陀 － 』, 2000, 板橋区立美術館　江戸文化シリーズ第16回特別展図録

今橋理子, 2009,『秋田蘭画の近代　小田野直武「不忍池図」を読む』　東京大学出版

内田欽三, 1987,「歌川豊春筆《浮絵阿蘭陀雪見之図》をめぐって　－浮絵と同時代絵画の周辺―」『サントリー美術館廿五周年論文集』2:81-105

内山淳一, 1993,「秋田蘭画を読む　小田野直武筆《不忍池図》をめぐって」『日本美術の水脈　辻惟雄先生還暦記念会編』ぺりかん社 89-114

内山淳一, 1996,『江戸の好奇心　美術と科学の出会い』講談社

『江戸の泥絵展　渡辺紳一郎氏コレクション』, 1978, 北海道立近代術館　展覧会図録

『江戸の科学大図鑑』, 2016, 河出書房

太田桃介他, 1974,『図録秋田蘭画』三一書房

岡泰正, 1992,『眼鏡絵新考』筑摩書房

小野忠重, 1967,「偉大な美術史家の回想　―天理図書館黒田源次旧蔵品によせて」『ビブリア』天理図書館刊行37：65-72

小野忠重, 1968,『江戸の洋風画』三彩社

岸　文和, 2004,『江戸の遠近法　浮絵の視覚』勁草書房

黒田源次, 1922,『西洋の影響を受けたる日本画』中外出版

黒田源次, 1947,「秋田系洋画管見」『みづゑ』506：12：41-43

Sharon Valiant,1993, Maria Sibylla Merian: Recovering an Eighteenth-Century Legend, *Eighteenth-Century Studies* Vol. 26, No. 3 (Spring, 1993), 467-479

『世界に挑んだ7年　小田野直武と秋田蘭画』, 2016, サントリー美術館 展覧会図録

タイモン・スクリーチ, 1999,『大江戸視覚革命』作品社

武塙慎太郎, 1989,『画集　秋田蘭画』秋田魁新報社

武塙林太郎, 1994,「曙山・直武と蘭癖家たち」『洋風画の系譜展　長崎・江戸　西洋へのまなざし』千秋美術館図録：14

田中優子, 2014,「江戸人たちの驚きの世界」『のぞいてびっくり江戸絵画　科学の目、視覚の不思議』展　サントリー美術館　展覧会図録：8-13

成瀬不二雄, 1969,『東洋美術選書　曙山・直武』三彩社

成瀬不二雄, 1980,「小田野直武の日本風景図について」『ビブリア』75：363-380

成瀬不二雄, 1995,『司馬江漢　生涯と画業　本文篇』八坂書房

成瀬不二雄, 1998,『日本絵画の風景表現』中央公論美術出版

芳賀徹, 2004,『平賀源内』朝日選書　朝日新聞社

平福百穂, 1930,『日本洋画曙光』　岩波書店

「本會記事」, 1891,『日本美術協会報告』（明治24年11月30日付）47：1, 7

山口泰弘, 1981,「小田野直武筆　『日本風景図』と『富嶽図』について　-真景図と風景図の接点-」『美術史』111：26-40

山口泰弘, 1993,「外光表現の遊戯性　江戸の洋風趣向」『日本美術の水脈　辻惟雄先生還暦記念会編』ぺりかん社：89-114

山口泰弘, 1993,「風景画の主題と構想」『日本の美術』[No.327 小田野直武と秋田蘭画　三輪英雄]：88-94

山本丈志, 2009,「小田野直武の洋風画　―落款にみるその成立と制作期間についての考察―」『鹿島美術財団年報』26別冊号：108-119

『洋風画の系譜展　長崎・江戸　西洋へのまなざし』, 1994, 秋田市立千秋美術館　展覧会図録

『渡辺紳一郎コレクション　江戸の泥絵展』, 1978, 北海道立近代美術館　展覧会図録

国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要第12号 pp. 53-62（2021）

中嶋嶺雄の日本外務省批判

名　越　健　郎

要旨

国際教養大学（AIU）を創設した中嶋嶺雄初代学長兼理事長（1936 － 2013）は、中国問題の権威として論壇で活躍し、晩年はAIUでのグローバル教育の成功で大学革命を起こした立役者として知られる。しかし、中嶋が長年の膨大な著作や評論活動で、日本外交を舌鋒鋭く批判していたことは、若い世代にはあまり知られていない。中嶋は中国に下手に出て浮薄な友好を煽る日本外交を「位負け外交」と称し、いずれ中国を高飛車にさせ、日中関係を悪化させると警告した。ロシアに対してはゴルバチョフ時代から北方領土問題解決の好機が到来したとして、日本も譲歩しながら早期に決着させるよう主張したが、日本外務省は千載一遇のチャンスを生かせなかった。今日、経済成長を遂げた中国は、日本への圧力を強め、尖閣諸島を力で奪いかねない展開となってきた。北方領土問題ではプーチン政権が強硬外交を貫き、安倍晋三首相が力を注いだ平和条約交渉もあえなく吹き飛んだ。本稿では、中嶋の外務省批判を紹介しながら、日本の対中、対露外交失敗の経緯を探った。

キーワード：中嶋嶺雄、日本外交、中国、ロシア、日本外務省

Criticism of Japanese Foreign Ministry by Mineo Nakajima

NAGOSHI Kenro

Abstract

Professor Mineo Nakajima(1936-2013), the first President of AIU and a famous specialist on China, authored 119 books in his life. He was known for his harsh criticism of the Japanese Foreign Ministry, especially on its China and Russia policies. He blamed Japanese policy toward China as "weak-waisted diplomacy" and warned it would eventually worsen relations between the two countries. He also argued that the opportunity for Russia and Japan to resolve the Northern Territories issue had arrived since the Gorbachev era, and that Japan should make concessions and settle the issue as soon as possible. The Japanese Foreign Ministry rejected and neglected Nakajima's argument. However, presently, the Japanese foreign policies toward China and Russia face great difficulties. In this essay, I analyze the controversy between Nakajima and the Foreign Ministry by examining the legitimacy of their positions.

Keywords:, Mineo Nakajima, Foreign policy, China, Russia, Japanese Foreign Ministry

Ⅰ.「日中は対決せよ！」

中嶋は「発信する学者」であり、「行動する学者」だった。生涯、119冊の単著を出版し、口述筆記の著書を除くと大半が版を重ね、天安門事件直後に緊急出版した『中国の悲劇』などベストセラーもある。巧みな筆力と構成、謎解きの面白さなど、読者を引き込む迫力があった。大半の学者の著書が、独りよがりで文章も硬く、「初版即絶版」(大手出版社幹部)と皮肉られるのとは大違いで、世論に受け入れられた。生涯を賭けて研究する対象に対して、信念を持って論評し、批判を恐れなかった。リアリズムに基づく国際関係論の独特の分析から、日本外交で多くの提言も行った。

中嶋はもともと思想的に左翼であり、1960年の反安保闘争では学生運動に没頭し、全学連の幹部だった。学生運動での機動隊との対峙が、思想戦での勇気や責任感につながったと思われる。処女作の『現代中国論』はソフトなマルキストの立場から毛沢東思想や文化大革命を批判したものだった。その後中嶋は、マルキシズムから完全に決別し、70年代以降は保守派に転向する。正確には、穏健保守であり、大学改革では革新派の革命家だった。

1969年から1年半、外務省調査研究員として香港の日本総領事館に勤務した経験も思想的転向を決定的にしたようだ。当時の中国は外界から閉鎖され、香港が中国情勢の観測拠点だった。日本のリベラル派や親中派が67年に始まった文化大革命を好意的に取り上げる中、中嶋は文革を毛沢東が仕掛けた権力闘争と突き放す視点から多くの論文を執筆した。

その過程で日本の対中外交に違和感を持ち、外務省批判を強めていった。文芸春秋社の雑誌『諸君！』に連載した「中国を見つめて－私の香港通信」というコラムで、「日本は真正面からもっと中国に対決すべきであって、まともな主張と批判によってこそ中国を怒らせるべきであろう。そうした対決を経て、日中間の真の架け橋を築くべき機転を探り当てることができる。一時の断絶もあえて恐れない……中国人は大人であり、中国は大国である」と書いた[1)]。『諸君！』(1970年5月号)のコラムのタイトルは、「日中は“対決”せよ！」だった。

日中国交回復前、中国は激しい「日本軍国主義」批判を展開したが、70年7月号のコラムでは、それに沈黙している日本政府を批判し、「権力の敗者は中国を目指す」とのタイトルで、「日本の政治家はどうも、現役を退くにつれて、中国問題により関心を示すようになる。現実政治の敗者が、果しえなかった大望を中国問題に賭けようとしている」と皮肉った[2)]。

中嶋は72年9月の田中角栄首相訪中による日中国交回復にも批判的で、「田中内閣成立から2か月余りでの日中国交樹立は、あまりに電撃的であり、国内の政策的合意や対中外交における主体性を逸脱するものだった」「田中内閣の拙速外交の代価は、以後の日中関係を貫いて支払わ

れねばならなくなった」とその後の日中関係の暗転まで予測していた[3)]。

拙速な日中国交について中嶋は、日本側が前年のニクソン訪中発表を事前に予測できなかった「ニクソン・ショック」の屈辱が、対中拙速外交につながったとし、将来に禍根を残すと書いている。この論文では、82年の段階で中ソがいよいよ和解プロセスに入ったと分析し、「永遠の中ソ対立」を夢想する日本外務省の楽観主義に冷や水を浴びせた[4)]。

Ⅱ．対中位負け外交に警鐘

中嶋の対中外交批判は、当初は田中派ら自民党親中派に向けられていたが、次第に外務省の「チャイナ・スクール」批判に移っていく。

70年代後半は日中友好の時代で、日本は激しい中ソ対立の中で、中国を選択し、ソ連に敵対姿勢を強めた。78年、中国の主張に沿って、ソ連を念頭に置いた「反覇権条項」を含む日中平和友好条約が締結されると、中嶋は、これによって日本が米中ソの熾烈な戦略的角逐に巻き込まれ、中国の戦略に追随する形になったとし、「より慎重に考慮されるべきだった」と指摘した[5)]。実際に、ソ連はこの条約に反発し、北方領土への空軍力配備など軍事基地化を強化した。しかし、日本外務省は対中ODA（政府開発援助）を増大させ、中ソ対立の中で中国一辺倒外交に突き進んだ。

日中国交樹立前後から、尖閣諸島の領

中嶋嶺雄初代AIU学長

有権問題が影を落としていたが、78年に訪日した鄧小平は「尖閣の問題は次の世代、さらに次の世代に持ち越して解決すればいい」と主張し、日本の政治家や外務省は「さすが鄧小平」と大歓迎した。中嶋によれば、鄧小平は74年に内部の会議で、「尖閣列島の闘争は長期的な闘争で、長く久しく継続せねばならない」と述べていたが、日本側は「棚上げ」発言を優先し、内部発言を問題視しなかった[6)]。

中嶋は、尖閣問題が先鋭化した2010年、日中友好時代に中国が尖閣で挑発しても日本側が厳重に抗議してこなかったことが中国を突きあがらせたとし、「いわゆる『日中友好』外交だけでは、日中関係を律せられないことを日本外交は身に染みて学んだはずである」と書いた。松田康博・東京大学教授は「尖閣問題に関する論点のほとんどは、（70年代に）既に中嶋によって指摘され尽くしている」とコメントしていた[7)]。

日中関係は70年代、80年代と「日中友好」時代を迎え、日本は官民挙げて巨額ODA（政府開発援助）や対中技術協力、投

資協力を行い、それが中国経済躍進に大きく貢献した。しかし、中国共産党が民主派運動を戦車で弾圧した1989年の天安門事件が分水嶺となり、日中関係は変質していく。中国指導部にとって、体制存続が最優先課題となり、イデオロギーに代わって愛国主義を体制維持の中核手段とした。その過程で、「反日」を愛国心高揚に利用していった。

江沢民指導部は90年代に反日教育を再開し、日本の中国侵略を強調する映画やテレビドラマを奨励した。尖閣や教科書問題、靖国問題なども次々に先鋭化していった。21世紀に入ると、政権が裏で操作する反日デモが頻繁に行われるようになった。

一方で、天安門事件の民主化弾圧で西側諸国が中国への経済制裁を敷く中、真っ先に制裁解除に動いたのは日本だった。日本政府は中国側の要請に応じ、92年に天皇訪中を実現させた。日本政府・外務省は、「中国側の条件や要請を必要以上に考慮し、常に中国を刺激しないことを対中国外交の最優先課題に位置付けてきた」(中嶋)[8)]。

今日、国内総生産(GDP)で日本の3倍に成長した中国の習近平政権は、日本を無視ないし蔑ろにする外交が顕著だ。沖縄県尖閣諸島の周辺海域では、中国海警局公船の度重なる海域侵入が続き、武力占領の危険にさらされている。こうして、70、80年代に「永遠の日中友好」(中嶋)を夢想した日本外務省の対中外交はすっかり破綻してしまった。

中嶋は日中関係悪化の大きな原因は、弱腰の対中姿勢にあると繰り返し指摘してきた。87年の著書『中国に呪縛される日本』では、「わが国は、教科書問題、靖国問題、あるいは光華寮の問題等々、中国側に内政干渉一歩手前のような強硬姿勢を示された時、常に『対中位負け外交』『対中国謝罪外交』によってその場を糊塗してきたのである」とし、日本外交は「あまりに没理念的で近視眼的」と書いた[9)]。

2002年の講演では、「3兆円近い巨額のODAを中国に供与して、いっさい中国に感謝されることなく、また中国はそれを表にださないことに努めています。反日教育は盛んにしますが、ODAによって例えば北京首都空港や上海浦東国際空港や多くの高速道路が建設されていることには、一切触れようとしません」と指摘した[10)]。

ただ、一連の中嶋の論説では、日本が中国に言うべきことを言い、「対決」することで中国がそれに反応し、日中間の「真の架け橋」を築けるのか、その展望は十分に示されていない。日本の対中外交が弱腰だったことは納得できるが、政権延命を第一義とする現在の習近平体制をはじめ、歴代中国政権が率直かつ対等な対話に応じてくるとみるのはナイーブだろう。

Ⅲ. 新たな外務省改革を

中嶋は「対中位負け外交」の大きな原因が、対中外交を取り仕切る外務省チャイナ・スクールにあると強調する。月刊誌

『VOICE』(2002年7月号)では、北朝鮮家族5人が瀋陽の日本総領事館に亡命を求め、中国人民武装警察によって取り押さえられた瀋陽事件に触れ、日本政府が抗議らしい抗議をしなかったことを批判しながら、「『日中友好』の美名に隠れた『日中癒着』の体質は、実は国交正常化以前から存在していた。対中外交では、どこの国の外交官か分からないような外務官僚が省内を跋扈し、いわゆるチャイナ・スクールと呼ばれるグループを形成してきた」とし、駐中国大使－アジア局長－中国課長－中国課首席事務官と連なる対中政策の枢要ポストが親中派によって牛耳られ、対中外交を歪めてきた現状を批判した[11)]。

中嶋は「チャイナ・スクールのピラミッド構造は、戦後日本外交に大きな害悪をもたらしたのみならず、政治家たちの『日中癒着』の構造をつくりあげた原因でもある」と指摘。瀋陽事件の不手際は起こるべくして起こったと書いた。中嶋はこの論文で、「恥辱にまみれた従来の外務省に代わる新しい外交省庁の誕生」にまで言及した[12)]。この頃、組織防衛に走る外務省幹部が激しい言葉を使って中嶋を非難していたのを、記者だった筆者も聞いたことがある。ある幹部は、「外務省のカネで香港総領事館の研究員をしていながら、よく外務省を非難できるものだ」と嘆息していた。しかし、外務省予算はすべて税金であり、この発言は思い上がりも甚だしい。

論文が書かれた2002年は外務省改革が論議を呼んだ年だった。要人外国訪問支援室長による9億円に上る外交機密費流用事件が刑事事件になり、大使の一連の汚職、腐敗、セクハラなど不祥事が次々にメディアで報じられた。2001年に小泉政権下で起用された田中真紀子外相は外務省を「伏魔殿」と称し、独特の破壊力で外務省の諸問題を表に出した。

この頃から、外務省チャイナ・スクールはネガティブな語感を持つようになり、中嶋の批判を受けて『産経新聞』などがチャイナ・スクールの批判記事を連載した。筆者は外務省取材の経験から、チャイナ・スクールの外交官が中国の意向を日本政府に受け入れさせようとしたのは、個人の思想信条というより、外交官特有の出世競争の要素が大きいとみている。わが国の外交官は、国際的な競争はほとんどないが、省内の出世競争は熾烈を極めるのだ。

その後、世論の批判を受けて、親中派チャイナ・スクールは凋落し、彼らがアジア太平洋局長や駐中国大使に就くことは減っていった。

田中の後任、川口順子外相の下で外務省改革が行われ、硬直的人事の是正や外交機密費削減、在外公館における難民･亡命者受け入れの体制整備などが決まった。筆者は、あれから20年近くが過ぎ、外務省には新たな改革が必要とみている。

実はこの数年、日本経済の成長率はほぼゼロなのに、外務省予算は毎年10％以上増加している。2020年の日本経済は新型コロナ禍で前年比5－6％のマイナスな

がら、外務省は21年度概算要求で13％の増額を行った。毎年2,3カ所に大使館、総領事館が新設され、現在の在外公館は約230カ所に上る。在外公館が増加したため、学生時代に一度キャリア試験に合格するだけで、2,3カ所の大使、総領事を経験できる。そのキャリア試験も依然として、幹部らの子弟を優先採用するネポティズムが残る。

人口が減少し、日本の経済プレゼンスも相対的に低下する中で、外務省は異常とも言える拡大路線を進めている。国内企業は人手不足なのに、経済に直結しない海外のお役所仕事を次々に増やしている。在外勤務は多くの手当が付き、国内の収入の3倍近い。それでいて外交成果はほとんどない。グローバル化の時代には、首脳外交が重要な意味を持つだけに、首相官邸の外交機能を強化し、機動的な「小さな外務省」「小さな大使館」に再編してはどうか。

Ⅳ．北方領土で日本も譲歩を

中嶋は2013年2月に急死する直前まで元気で、病院で新聞社のインタビューを受けていた。筆者は亡くなる4カ月ほど前、中嶋が定宿にしていたクリプトン・ホテルのレストランで、二人で夕食を取ることがあったが、話題がロシアに及ぶと、中嶋は「僕が言ったように日本外交が動いていたら、今頃は国後を含めて3島は還っていただろう」と語ったことが印象に残っている。中嶋は1985年のゴルバチョフ政権発足直後から、ゴルバチョフ改革を「本物」とみなし、「歴史的好機が到来した」として、日本も妥協的アプローチで早期に領土問題を決着させるべきだと訴えていた。

中嶋は87年に「ゴルバチョフ・ソ連の読み方」(第一企画出版)という本を書いており、その中で交渉が長年凍結されていた北方領土問題の打開を訴えた[13)]。

「日本は第二次世界大戦で、無謀な戦争をして敗北したその結果、ソ連に北方領土を奪われたのであり、この冷厳な現実はいかんともしがたいのだ。だが、今日の日本は、第二次大戦後の廃墟の上に、北方領土抜きで繁栄を見事に築いて、いよいよ本格的な国際化時代を迎えようとしている。このような現実を直視した上で、なお北方領土問題の解決を求めようとするのであるならば、それにはやはりある種の妥協的譲歩をとりつけることが最善の道ではないか」

「もしも二島返還が可能ならば、まず二島を確保し、残りの二島については、あくまで領有権を主張しつつ、共同利用、共同開発もしくは買い取り等の道を探ることが現実的ではないかと思う」

「今後の日ソ関係は経済交流を中心に進み、ソ連の国内事情からしても、対日依存度が高まると思われる。これは、日本が外交的に使える最も強力なカードだ。日ソ間の相互依存関係をソ連にとってよ

りバイタルなものにすることが重要であり、それが北方領土問題にも、日本の安全保障にとっても、アジアの平和にとっても重要だ」

中嶋の主張は、歯舞、色丹２島の引き渡しを規定した1956年の日ソ共同宣言を基礎に、そこから積み上げて交渉するというものだが、具体的な解決策を持っていたわけではなかった。要は、歴史的な時代の変化を利用して、日本も妥協しながら早急に決着させるということだ。

中嶋はソ連時代、毎年モスクワを訪れ、ソ連の中国専門家らと交流していた。日中ソの三角関係の中で、日ソが敵対するのは地政学的にも好ましくないとし、ソ連の脱社会主義は世界史的な意義があり、新生ロシアを西側陣営に取り込むような外交を支持していた。また、「平和条約問題はそれほど重要な問題ではなく、妥協して早期に決着させるべきだ。それよりも、冷戦終結後にグローバル化の大波が来るので、日本はそれに集中すべきだ」と述べていた。

中嶋嶺雄著作選集全８巻

中嶋は、グローバル化の先頭に立つべき大学の改革が、左翼守旧派教授によって妨害されることを憂慮していた。実際、東京外語大学長時代に手掛けた大学改革は、外語大に居座る多数の左翼守旧派教授らによって妨害され、挫折した。その後、ワンマン学長兼理事長としてAIUで全く新しい理念を実行し、成功させた。

Ⅴ．　領土問題で本格論戦

中嶋は80年代後半、論壇で柔軟な対ソ外交と領土問題の早期決着を積極的に訴えたが、外務省や保守派の学者らから「２島返還論」と批判を浴びた。外務省擁護の立場に立つOBの伊藤憲一・青山学院大学教授は『諸君！』(87年２月号)で中嶋の主張を「ソ連の非合法な北方領土占拠を認める敗北主義的提案」と批判。中嶋は同誌(87年3月号)で、「外交で重要なのは、最後通牒を突き付けることではなく、相手側に受け入れられる現実主義的な提案をすることである」「ソ連をアジア太平洋の経済圏のなかに組み込むことが日本の国益に適う」と反論した。両者は『諸君！』(87年４月号)で対談し、この時期で唯一の北方領土問題をめぐる本格的な論争が行われた。しかし、外務省はこうしたオープンな議論は４島返還に向けた国民世論を混乱させるとし、背後で議論の中止を働き掛けた模様だ[14)]。

当時の政界やメディアは、「４島即時一括返還」論が支配的だった。時代を歴史的チャンスととらえ、交渉加速化を求め

る声は少なく、中嶋の２島返還論は多くの批判を浴びた。これに対し、中嶋は前掲書で、「もとより、この意見について強硬論者からの批判も根強い。中には、この言論の自由なわが国において、四島返還以外のオプションを論議することさえタブー視し、ソ連の対日世論分断に乗るものだと批判する人もいる。このような人々は、いまや日本が国際化時代の先端をきって、すべてをガラス張りにし、あらゆる自由と多様性を許容することこそ、真の社会的強靭性、安全保障力につながるという根本的哲学を欠如していると言わざるを得ない」と反論した[15)]。

ゴルバチョフ改革はその後破綻し、ソ連邦は91年12月に崩壊。北方領土問題はソ連を継承した新生ロシアに引き継がれた。筆者は、この頃が過去75年の北方領土問題の歴史で唯一、日本に有利な形で決着できるチャンスだったとみている。

ソ連崩壊後の混乱でロシアは経済危機に直面したが、日本は冷戦の勝者で、世界のGDPの16％（現在は６％弱）を占めていた。92年の日本のGDPはロシアの42倍で、ロシアは圧倒的な先進国・日本の経済援助を切望していた。

スターリンが大嫌いなエリツィン大統領は「スターリン外交の誤りを正す」「勝者が敗者の領土を奪うのは間違いだ」とし、北方領土問題を必ず解決したいと訴えていた。当時のブッシュ（父）米政権も、ロシアを西側陣営に加えるため、領土問題の早期解決を両国に求めていた。

だが、この千載一遇のチャンスに日本外務省は動かなかった。冷戦期、首相官邸は外交を外務省に丸投げし、ロシア・スクールなど対露強硬派外務官僚が対露政策を牛耳っていた。92年３月、ロシア外務省は、①歯舞、色丹の引き渡し交渉②国後、択捉の帰属問題交渉③二つの交渉がまとまったら平和条約締結－という秘密提案を非公式に提示したが、日本外務省は「４島返還ではない」として拒否した。

この提案は、戦後75年間でソ連・ロシアが出してきた最も柔軟な解決策だったが、外務省の一握りの高官だけで無視を決め、官邸にも事後報告だった。エリツィンは93年に二度訪日したが、宮沢喜一首相は一度もモスクワを訪れなかった。その後、ロシアの政争が激化し、エリツィン外交も保守化したため、交渉のモメンタムは失われていった。あの時対露政策を担当した外務省幹部はその後、何事もなかったように出世の階段を上り、外交失敗の反省もなされなかった[16)]。

Ⅵ.　外交はタイミングがすべて

北方領土交渉が今日、すっかり暗礁に乗り上げたことは周知の通りだ。プーチン政権は民族愛国主義を前面に出し、ラブロフ外相は「敗者には領土を要求する権利はない」「日本は領土要求によって戦後体制を覆そうとする唯一の国だ」と高飛車な姿勢を貫く。2000年以降の資源価格高騰でロシア経済は高成長を遂げる一方、日本経済は長期低迷時代に入り、経済カー

ドの効力が薄れた。ロシアのウクライナ介入で欧米は対露制裁を強め、オバマ米政権は日本に対し、ロシアとの首脳交渉に反対した。

安倍首相は戦後最も親露的な首相であり、領土問題解決に使命感を持って臨んだ。任期中にロシアを11回訪問し、プーチン大統領との首脳会談は計27回に上った。国是である「４島返還」の旗を降ろし、56年宣言を基礎にした交渉、つまり「２島返還論」に転換した。外務省の尺度からすれば、保守の安倍首相が「国賊」「敗北主義者」になったことになる。

だが、安倍の涙ぐましい努力も通用せず、ロシアは「ゼロ回答」のままだった。安倍は「平和条約が実現しなかったことは断腸の思い」と述べて退陣した。

安倍外交の失敗は当初から自明だったかもしれない。むしろ、日本は92年のソ連崩壊直後に安倍外交のような積極的融和路線で臨むべきだった。日本外交は山が動いた時に動かず、山が微動だにしない時に動く奇妙な習性がある。中嶋は日ごろ、「外交ではタイミングが最も重要」と述べていたが、外務省は外交のプロを自認しながら、タイミングを読んで外交攻勢に出ることができない。国粋主義的な現在のプーチン政権に働きかけても、領土返還の要求が通るとは思えない。

日本外務省が夢想した「永遠の中ソ対立」も完全に外れてしまった。プーチン、習近平両政権は軍事的連携や経済協力を強め、米国に敵対する「準同盟」の様相を呈してきた。中嶋は82年に出版した『中ソ同盟の衝撃』で、「アメリカの世界政策も、わが国の安全保障も、すべて中ソ対立の永続を根本前提にしているだけに、今度は“中ソ同盟の衝撃”にあわてふためいて、針路の見定めさえつかなくなる可能性も大いにあり得る」と早々と警告していた[17)]。

対中外交の失敗で外務省チャイナ・スクールが影響力を低下させたように、外務省ロシア・スクールの凋落も著しい。外務省では90年代末から、北方領土問題解決を悲願とする鈴木宗男衆院議員や佐藤優主任分析官らが「２島プラスアルファ」を主張し、「４島」の主流派との間で内部対立が拡大した。鈴木、佐藤は2002年、検察に逮捕され、投獄されるが、鈴木は参院議員として復活、佐藤も著書を量産する大作家となった。これに対し、ロシア・スクールは、外交官の自殺やノンキャリア組の大量退職などで混乱した。安倍外交を主導した経済産業省出身の官邸官僚は、「４島」にこだわるロシア・スクールに人事などで圧力をかけた。

歴史のIFだが、ソ連崩壊直後、中嶋方式で首相が訪露し、妥協しながら、大型援助を提示してエリツィンと直談判していたら、当時の日露の圧倒的な国力格差からみて、「４島」は無理でも日本が国後、色丹、歯舞を確保し、択捉に特別な権益を得る「３島プラスアルファ」の解決が可能だったかもしれない。しかし、時代を歴史的な好機ととらえ、一気に妥協的に決着すべきといった議論は、他の学者や専門家、記者の間で皆無だった。当時モ

スクワに記者として駐在していた筆者も同様で、権力闘争のカバーに追われてしまっていた。結局、筆者も含めロシア専門家は肝心な時に役に立たず、中嶋が単独で正論を吐いたということだ。

こうして、中嶋が孤軍奮闘、対中、対露政策で外務省と闘った論戦は、冷戦終結30年を経て完全に中嶋に軍配が上がった。その結果、中嶋が生前抱いていた危惧が現実となって日本外交を直撃しつつある。

謝辞

筆者は2021年3月でAIUを定年退職します。2010年から非常勤で教えに来ましたが、日本でAIUのようなユニークで教育力、競争力の高い大学は存在しません。秋田県とAIUの発展を祈ります。

注

1）『中嶋嶺雄著作選集３－裏切られた民主革命』(桜美林大学北東アジア総合研究所、2016年)184頁。『中国を見つめて』(文芸春秋、1971年)に収録。本稿の引用は、原則として桜美林大学版に基づいた。以下、『裏切られた民主革命』と省略。『中嶋嶺雄著作選集』は全８巻で、第３巻は松田康博東大教授が編集を担当した。

2）裏切られた民主革命』190頁。『中国を見つめて』(文芸春秋、1971年)に収録。

3）『裏切られた民主革命』254頁。『中央公論』1982年10月号に収録。

4）『裏切られた民主革命』264－266頁。『日中友好という幻想』(PHP研究所、2002年)に収録。

5）『裏切られた民主革命』310頁。『中国の悲劇』(講談社、1989年)に収録。

6）『裏切られた民主革命』223－224頁。

7）松田康博、『裏切られた民主革命』解説、378頁。

8）『裏切られた民主革命』310頁。『中国の悲劇』(講談社、1989年)に収録。

9）『裏切られた民主革命』288頁。『中国に呪縛される日本』(文芸春秋1987年)に収録。

10）『裏切られた民主革命』354－355頁。

11）『裏切られた民主革命』335－336頁。『日中友好という幻想』(PHP出版、2002年)に収録。

12）同上。

13）中嶋嶺雄、『ゴルバチョフ・ソ連の読み方』(第一企画出版、1987年)212－215頁。

14）長谷川毅、『北方領土問題と日露関係』(筑摩書房、2000年)102－106頁。

15）『ゴルバチョフ・ソ連の読み方』214－215頁。

16）92年の領土交渉失敗の経緯については、名越健郎『北方領土はなぜ還ってこないのか』(海竜社、2019年)第４章参照。

17）中嶋嶺雄、『中ソ同盟の衝撃』(光文社、1982年)5頁。

国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要第12号 pp. 63-72（2021）

秋田竿燈まつりへの外国人の参加

根　岸　　洋・熊　谷　　星・北　畑　有紀乃

要旨

2005年に設立された国際教養大学竿燈会は、交換留学生も含むメンバーで秋田竿燈まつりに継続的に参加してきた学生団体である。ミネソタ州立大学秋田校の時代にも外国人の参加があったことから、竿燈は過去20年以上に渡って外国人を参加者として受け入れてきた伝統行事と言える。本論文は国際教養大学竿燈会に焦点をあて、外国からの交換留学生がどのような形で参加してきたかを明らかにすることを目的とする。まず秋田青年会議所と上亀之丁竿燈会からの聞き取り調査を通じて、同会と外部との関わりについて論じる。次に同会に在籍した学生（正規生）を分析対象としたアンケート調査と交換留学生の聞き取り調査を通じて、交換留学生の行事への参加形態や外部との交流の実態について検討する。最後に調査結果を踏まえて、今後の外国人参加のあり方について展望を述べる。

キーワード：秋田竿燈まつり、国際教養大学竿燈会、交換留学生

Foreign Participants in the Akita Kanto Festival

NEGISHI Yo, KUMAGAI Akari and KITABATAKE Yukino

Abstract

The Kanto Team of Akita International University (AIU), founded in 2005, is a student body that includes exchange students who have continuously participated in the Akita Kanto Festival. Since some professors and foreign students from the Minnesota State University-Akita campus (MSUA) have participated in the Kanto festival in the past, it can be said that Kanto is a traditional event that has accepted participants from foreign countries for over twenty years. By analyzing the AIU Kanto team, this study aims to investigate how the exchange students of AIU joined the Akita Kanto Festival. First, we discuss the relationship between the AIU Kanto Team and external organizations based on interviews with the Junior Chamber International Japan (Akita) and the Kanto Society of Kami-kamenocho. Second, we analyze the exchange students' participation forms as well as their social interaction through the results of a questionnaire survey among degree-seeking students and interviews with exchange students. Finally, we discuss the future prospects of foreign participants in the Akita Kanto Festival.

Keywords:, Akita Kanto Festival, AIU Kanto Team, exchange students

1．はじめに

筆者のうち根岸は、前稿(根岸ほか2020)において竿燈行事(文化財の指定名称としては「秋田の竿灯」)についての先行研究を振り返り、秋田市竿燈会への聞き取り調査を通して、参加形態と後継者について論じた。その結果、本行事が古くから都市化・観光資源化と共に変容を遂げており、特に江戸時代の単位である「外町」の居住人口の減少に対応してきた歴史の一端が明らかになった。つまり本行事への参加者は本来外町居住者に限られていたが、町外へと拡大してきたのである。2002年段階で町(丁)内竿燈会に所属する会員のうち居住者割合は3分の1に過ぎず、3分の2は町外(県外も含む)参加者ということになる。また参加単位にも変化があり、囃子方に女性を受け入れたり、企業や学校など外部団体を単位とする参加形態を受け入れてきた。

他方、本行事に継続的に参加している外国人は国際教養大学竿燈会に所属する交換留学生や一部の町(丁)内竿燈会に限られる。本大学の設立以前、ミネソタ州立大学秋田校の時代からも外国人の参加があったというから、文化財としての「秋田の竿灯」は過去20年以上に渡って外国人を受け入れてきた伝統行事であると言える。

本稿では国際教養大学の竿燈会を検討対象とし、どのような形で竿燈行事に外国人が参加してきたかを論じる。1でこれまでの経緯をまとめ、外部との関わりに関する聞き取り調査(2)、国際教養大学竿燈会に関する調査について紹介する(3・4)。

2．国際教養大学竿燈会と外部との関わり

(1) 秋田青年会議所

秋田青年会議所(以下、「秋田JC」と略す)の竿燈会の代表(当時)である吉川脩氏に2019年11月21日にインタビューを行ったので、その概要を紹介する[1)]。聞き取り調査は根岸のほか、アジア地域研究連携機構プロジェクト研究員の成澤徳子が実施した。

まず、秋田JCと国際教養大学の繋がりについて聞き取りを行った。国際教養大学の前に設置されていたミネソタ州立大学秋田校(1990開校、2003年閉校)の、河辺町(当時)への誘致から秋田JCが関わっていたという。秋田JCは県内の大学と交流する機会を多く持ってきたが、同大学と秋田JCの間でも様々な交流が行われており、その一つに竿燈まつりがあった。同大学内に竿燈に関わる独立した団体はなかったものの、外国人留学生を含む継続的な参加者が、当時教員であったジョン・モック(John Mock)氏等が、竿燈まつりを通して秋田JCと関わりを持っていたことが背景にある[2)]。

2004年に開学した国際教養大学では、初代学長であった中嶋嶺雄氏をはじめとする大学の希望があり、学内の竿燈会立ち上げにあたって秋田JCが支援を行うことになった。この際、前述したジョン・

モック氏が同大学に引き続き在籍したこともあり、秋田JCが学内の竿燈会を全面的にサポートすることになったという。結果として、国際教養大学竿燈会は2005年4月1日に設立された。具体的には、古い竿燈を提供し、ユースパルなどで練習指導を行ったほか、竿燈まつり本番でも屋台の貸し出しをするなど様々な面で補助した。

国際教養大学竿燈会について、設立当時の2005～2006年には既に交換留学生が在籍していたと記憶している。かつてはたまに見かける程度であり、言葉の壁もあって彼らと話す機会もなかったが、近年参加人数が増えたせいか、竿燈まつり期間中の反省会などでコミュニケーションをとることが増えた。交換留学生の側から話しかけられることもあった。秋田JCとの合同練習会に参加するなどして技能を高める交換留学生も出てきており、近年は竿燈まつりの本番期間中だけでない繋がりができ始めてきたと感じると話す。中にはメディアに取り上げられるほどの技能と熱意を持った学生もおり、

写真1　交換留学生も参加する差し手の妙技（国際教養大学竿燈会提供）

留学期間終了後にも自発的に参加する事例が見られた。

一方、外国人留学生ならではの事情もある。まず差し手（写真1参照）である男子学生については、正規生・交換留学生も等しく技能習得が優先されるのは勿論のこと、先輩・後輩の上下関係が重要なことも理解してもらわなければならない。また女性が竿燈を触ってはいけないという伝統があることも理解してもらう必要がある。また秋田JCとの懇親会の場においても、どうしても交換留学生同士で集まる傾向も見て取れる。

今後秋田JCと国際教養大学竿燈会に所属する交換留学生との繋がりをさらに増やすためには、秋田JCのみならず各町（丁）内の練習への参加を続けていくことや、竿燈だけでない地域のイベントに参加を呼びかけることも必要ではないかと話されていた。

（2）上亀之丁竿燈会

竿燈まつりに参加する、いわゆる「出竿町内」の一つである上亀之丁竿燈会の、代表を務める富樫剛氏をインフォーマントに、主に国際教養大学竿燈会との交流について聞き取り調査を行った。調査日は2019年11月12日で、秋田JCの聞き取り調査と同じく根岸および成澤が担当した。なお上亀之丁は旧町名で、町内会としては秋田市大町1丁目に相当するという。

上亀之丁竿燈会では、秋田JCを通して国際教養大学竿燈会との合同練習を行ってきた。以前は大学キャンパスまで差し

写真２　国際教養大学の囃子方（国際教養大学竿燈会提供）

手の指導に行くことがあったが、近年は囃子方（写真2参照）の練習に付き合うことがある。竿燈まつり本番前だと大学の練習日以外で、国際教養大学の１期生が丁内の練習に参加するようになり、そこから定期的に学生を受け入れるようになった。交換留学生もそこに含まれる。このような交流を通じて、大学卒業後も卒業生が各町（丁）内の竿燈会に在籍するようになったと言う。

国際教養大学の事例を別にしても、上亀之丁竿燈会は外部参加者受け入れに抵抗が少ない方である。やる気さえあれば、初心者であっても会員になることができる。日常の練習に来られなくても本番中に来られるのであれば良いという方針だという。これまでに外国人での会員はいなかったものの、例えばかつて国際教養大竿燈会に参加したことがあり、就職先が日本国内であれば、十分に可能性がある。仮に外国人が町（丁）内竿燈会に入るとすれば、自分に合うスタイルのところを選べば良い。現役会員から練習の様子などを聞いて参考にすることもできるし、秋田JCや全体の竿燈会（秋田市竿燈会）に紹介してもらうことも可能である。

他方、過去に旅行会社経由で竿燈まつり本番に観光客を受け入れたこともある。もちろん差し手や囃子方としてではないが、同じ半纏を着て行進に参加してもらったり、太鼓を叩いてもらう、会場清掃などの体験をやってもらった。また外国メディアの取材を受けたこともある。

３．国際教養大学竿燈会に関する調査

（1）調査の概要

国際教養大学竿燈会の第2期・第4～16期の14学年に渡る正規生・卒業生を対象に、インターネットを利用したアンケート調査を行った。なおここで言う「期」は大学入学年度を意味しており、開学年の2004年に入学した学年を第1期生とする。竿燈会は2005年4月に設立されたため、第2期から学生が在籍したことになる。調査期間は2021年1月であるが、質問項目の検討にあたっては筆者のうち熊谷が、2020年12月に国際教養大学竿燈会OB・OGと意見交換を実施した。主な質問項目は以下の通りである。

①所属する期の正規生[3]の数（退会者も含めた最大数）および交換留学生[4]の数を教えて下さい。
②（各期の）竿燈会に入会した交換留学生の数（春＋秋、退会者も含めた最大数）を、差し手・囃子方の数も含めて教えて下さい。

③(各期の)交換留学生の竿燈会参加の形態(日常の練習、他団体との練習、祭り等)について教えてください。

④学外での活動に積極的な交換留学生がいた、あるいはいなかった背景や理由があれば教えてください。

⑤交換留学生から、学外の竿燈関係者とのコミュニケーションを求める声がありましたか。

⑥竿燈会在籍時に交換留学生からあがった意見などがあれば教えてください(ジェンダーなど含む)。

⑦竿燈に参加した交換留学生が、帰国後に再び秋田に戻り竿燈に参加するような仕組みはありますか。「ある」場合、どのようなものですか。

(2) 交換留学生の数

質問項目①・②の結果を元に、各期の交換留学生の数を第1表に示した。交換留学生がいない期(学年)もあるが、1～5名が6期、10名以上が4期に渡って在籍したことが分かる。各期の平均は6.4名となり、最大人数は25名で正規生数を上回っていた。特に近年(14～16期)は10名以上が在籍している。差し手と囃子方を比べると、後者により多くの交換留学生がいたことが分かる。

第1表　交換留学生の数

なし	4（期）
1～5人	6（期）
10人以上	4（期）

※交換留学生の平均人数は6.4人、最大人数は差し手10・囃子方15の25人。

第2表　交換留学生の参加形態一覧(抜粋)

- 日常の練習(大学キャンパス内)：全員参加
- 秋田竿燈まつり：体力、技術が水準に達していれば参加(全員参加もあり)
- 外部団体との練習：日本語ができるなど限られたメンバーが参加。参加者数は近年増加傾向にある。
- 県外、海外への出竿：参加はほぼない

なお正規生の平均は13.85人で、交換留学生の平均の倍以上となる。交換留学生の数が正規生を上回ったのは4期間である。

(3) 交換留学生の参加形態

質問項目③の結果を基に、交換留学生の参加形態を第2表にまとめた。団体としての活動のうち、週3回の日常の練習については基本的に全員参加である。竿燈会に参加する交換留学生が増えてからは、日常の練習で留学生の中でも上達が速い人と、コツを掴むのに時間がかかる人との差に苦しむ声が聞かれるようになった。

また竿燈まつり本番は必要な技能習得がなされていれば参加でき、中には妙技会の主力として活躍する交換留学生もいた。ただし彼らが外部団体との練習に参加するためには、ある程度日本語でのコミュニケーション能力を身につけておく必要がある。外部団体との練習に参加する交換留学生数は限られることが多かったが、近年は同時通訳をつけるなどして増加する傾向にある。

このほか、県外や海外への「出竿」(竿燈演技を秋田市外で行うこと)には、交換留学生が参加した実績がないと言うことで

ある。交通費の負担や学習の問題もあり、秋田県外まで参加することは相当ハードルが高いと考えられる。

(4) 交換留学生の外部団体との交流

質問項目④の結果から、秋田JCや町(丁)内竿燈会などの外部団体との交流に、積極的に参加する交換留学生がいたことが分かった。交換留学生個人が日本語を学びたい、真剣に技術を学びたいなどの個人の資質にもよるが、正規生が働きかけて学外の活動に誘ったり、外部団体に快く受け入れてもらったことも大きかったと言う。これらの交換留学生の中で、4で後述するように、大学院生として秋田に戻ってくる場合もある。伝統行事への外国人参加者を育てるような機能を、国際教養大学の竿燈会が果たしている証左と言えよう。

他方、交換留学生が外部との交流に消極的だと思われる理由を第3表にまとめた。これはあくまで正規生の立場から推察された項目であり、交換留学生自身が感じたことではないことに注意されたい。

第3表　交換留学生が外部との交流に消極的な理由

- 日本ならではの集団行動(上下関係、練習回数、拘束時間、反省会への参加など)
- ジェンダーの問題(差し手・囃子方の区別も含む)
- 日本語能力の問題(通訳なしではコミュニケーションが取れない場面が多い)
- 秋田竿燈まつりへの参加レベル(技能・体力)を満たせないこと
- 短期留学生であるがゆえの課題(竿燈会の運営側に回るのは難しい)

第4表　交換留学生と外部の接し方に関する意見

- 交換留学生について、日本人学生(正規生)と同等の技能を身につけることまで求められていないように感じる
- 日本語を話せる交換留学生しか地元の方とコミュニケーションを取っていないことを、交換留学生の側で気にしているようだ
- 留学期間が短期で終了してしまうため、身に付けられる技術が圧倒的に違い、地元の人と関わる機会がないように思う

アンケート調査から浮かび上がるのは、日本語能力や技能習得の問題もさることながら、日本独自の集団行動が障壁となって、交換留学生が外部団体との交流に積極的になれないと捉えられていることである。週3回の練習時間や反省会への参加も含め拘束時間が長く、また上下関係があることも要因と思われているらしい。他方、質問項目⑤によれば、学外とのコミュニケーションを求める声が複数学年の交換留学生にあったことも確かである。交換留学生側にはローカルな交流を求める声があるものの、それが十分に達成されていない、していないと考えられていることが明らかとなった。

交換留学生と外部の接し方については、質問項目⑥でもいくつかの意見が寄せられた(第4表)。興味深いのは、正規生と同じ技能まで身につけることを地域に求められていないとみなす意見である。この点について、交換留学生や地域の町(丁)内竿燈会のメンバーはどう感じるのか、意識の差がないかどうか追加調査が必要であろう。

（5）交換留学生から聞いた意見

質問項目⑥の結果、様々な視点からの意見が寄せられた。まず男性が差し手を、その他のメンバー(女性だけでなく男性も含む)が囃子方を務めるとする性別分業の状態については、男尊女卑の一例として捉えられているとの指摘が複数あった。この点については、昔からの文化という説明にも納得していなかったようだとの指摘があった。また竿燈まつり本番に関しては、集合時間をはじめとした時間感覚に関するの認識の違いが大きいとのことである。

竿燈に関する技能習得についても様々な意見があった。地域や竿燈会OB・OGの目を意識して、正規生だけでなく交換留学生にも「ある程度の技能」を身につけさせることを重視するために、厳しいルールを課したり、短期間に習得できる技能の差を重視せざるを得ないとの認識がある。そのため、交換留学生の側からは不満の声があったとのことである。一方、そのような厳しいルールによって退会する交換留学生が出ることを防ぐため、交換留学生に課すルールを緩めるなどの対応をとっているらしい。

また、幹部として竿燈会の運営側に回りたいとの声も交換留学生から上がったものの、やはり短期間(長くても一年間、短ければ一学期のみ)の在籍期間では任せることが難しいとのことであった。

（6）交換留学生の秋田再訪の仕組み

質問項目⑦の結果、交換留学生が再び竿燈行事に参加するためのシステムは、同会の同窓会(燈友会)などには特段ないことがわかった。ただし実際に再訪する元交換留学生は一定数おり、個別の人間関係を通じて参加が実現しているという。また元交換留学生の中にもOB・OGと言って良いポジションの人間がいるとのことである。

4．交換留学生からの聞き取り調査

（1）調査の概要

2018年度(2019年1月～3月)に、当時国際教養大学竿燈会に在籍していた交換留学生5名(男性2名、女性3名)を対象に聞き取り調査を実施した。学部生に加え、竿燈会に計2年間在籍した大学院生1名も調査対象に加えた。聞き取り調査は下記の5つの項目を基本としつつ、応答によって質問を掘り下げる方式を採った。

①なぜ竿燈会に参加したのか。
②竿燈行事を知ったのはいつ頃か。またどのようなことが契機となったか。
③差し手・囃子方の性差についてどう思うか。また差し手の方が囃子方よりも立場が上のように感じるかどうか。
④竿燈会に所属する日本人学生・交換留学生との関係性について
⑤言語の壁によって問題が生じたことがあるか。

上記の質問内容については、アジア地域研究連携機構文化遺産観光プロジェク

トのリサーチアシスタントとして雇用した、キリアコス・アナスタシウ氏[5](当時国際教養大学大学院)と根岸が合議して定めた。特に質問項目③については、多くの交換留学生から聞くことのあった話題であったため調査項目とした。本調査は「伝統行事への外国人参加」をテーマとしており、外国人のよりスムースな竿燈行事参加を実現するための方策を聞くために、問題点と感じる点を挙げてもらうことを意識して実施した。

聞き取り調査は根岸の指導のもとキリアコス氏を主体として英語で行い、各質問項目について録音と記録を行った。聞き取り調査は正規学生数名からも行い、交換留学生との認識の違いがあるかどうかについても検討した。

(2) 聞き取り調査の成果

聞き取り調査成果を第5表にまとめた。当該調査では多くのデータを得たものの、一般化を期するために成果を抜粋することにした。

質問項目①・②について、調査対象とした交換留学生の全員が入学式のパフォーマンスで竿燈会を知ったとのことであったが、アナスタシウ氏によれば事前に何らかの手段で竿燈行事を知り、それを目的に国際教養大学に留学する交換留学生もいると言う。大学ウェブサイトやパンフレットのほか、同じ大学から留学している友人からSNSを通じて教えてもらったケースもある。日本ならではの伝統文化を体験したいという動機だけではなく、日本語学習の機会を増やしたいと言う希望も大きいようである。

質問項目③について補足しておこう。竿燈会のOBを含む先輩―後輩の関係性や、規律ある集団行動に困惑する声が多かった。また差し手が男性に限られる文化を性差別的だと感じるのは、性差による区別そのものよりも、前者が行事の中心であり後者が引き立て役だと感じることが大きい。交換留学生の多くは、重量のある竿燈を持ち上げるのが女性には難しいことを理解しつつも、竿燈まつりでの位置付けの違いを消化し切れていないということらしい。

質問項目④については、正規生に与えられているのと同程度の負担が、交換留学生に課せられていないとする意見が目立った。確かに厳しい規則が多いことに

第5表　交換留学生を対象にした聞き取り調査の成果

- 文化的体験のみならず、友達を作りたい、日本語を勉強したい等の理由から竿燈会に参加
- 竿燈によって日本文化の新たな一面を学ぶことができる
- 文化の違いによる問題:上下関係や几帳面さ、集団行動などに戸惑うことがある。また男性が差し手、女性が囃子方を担当する点について、性差別的だと感じる交換留学生もいる。
- 正規学生に比べて会員として与えられる仕事の分担量が少ないと感じる
- 規則の多さや厳しさに不満もあったが、適切なマネジメントがなされていない点への不満が大きい
- 言葉の壁による問題：情報共有の遅さ、練習の内容伝達や人間関係の構築に支障がある

不満もあるが、それよりも正規会員としての仕事を等しく与えてほしいと感じているようである。

質問項目⑤については、日常の練習には何の不便も感じないものの、細かな情報共有に時間差があるとの指摘であった。正規生の側が交換留学生に負担を与えすぎていると感じているのとは正反対と言える。

5．小結

本論文では、まず国際教養大学竿燈会をサポートしてきた秋田青年会議所（秋田JC）や上亀之丁竿燈会の聞き取り調査成果を振り返り、本会の設立経緯や、交換留学生との関わりについてまとめた。次に同大学竿燈会のうち、正規生（卒業生含む）を対象としたアンケート調査を実施し、交換留学生の数や参加形態、外部団体との交流についての調査成果について紹介した。同大学竿燈会に参加する交換留学生の数は増加傾向にあり、いくつかの課題を抱えつつも、日常の練習のみならず、外部団体との合同練習にも交換留学生が参加するようになってきたことを示した。最後に交換留学生を対象にした聞き取り調査成果の概要を紹介し、差し手・囃子方の性差など、彼らが課題として感じている点等についてまとめた。

竿燈行事に関わる三者の異なるステークホルダーを比べてみると、外国からの訪問者である交換留学生を積極的に受け入れようとしている点では共通している。このような努力をミネソタ州立大学秋田校の時代から継続している点において、竿燈は変化に対して柔軟な側面を持った伝統行事であると言える。秋田JCによれば、県内の他の大学にも竿燈会に参加する留学生がいるとのことである。国際教養大学の事例も含めて外国人を参加者として受け入れてきた、伝統行事の一つと言えよう。

その一方で、交換留学生ができる限りストレスなく竿燈まつりに参加するためには、言語の壁はもちろんのこと、外部団体との交流をどのように実現するかが課題である。お互いが感じている課題や、特に交換留学生がどう感じているのかについて、内外に分かりやすく伝えることも必要であろう。

交換留学生の場合、秋田への滞在期間が短期に終わるだけに難しい事は否めないが、大学院生として秋田に戻ってきたり、ALT（外国語指導助手）などのJETプログラム（外国青年招致事業）の一環で、再び来日する元・交換留学生は一定数存在する。日本で就職するケースも少なからずあると聞いている。彼らが竿燈まつりを見にきたり、あるいは町（丁）内竿燈会のメンバーとして参加するような仕組みがあれば、伝統行事である竿燈まつりに、外部参加者が継続的に加わることに繋がると考えられる。

本論文は国際教養大学竿燈会の現状と課題についてまとめた研究ノートに過ぎないが、伝統行事と外部参加者をめぐる事例研究とすることを企図した。本論文

が、秋田の竿燈まつりを盛り上げる一助となれば幸いである。

謝辞

本論文は、日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」実社会対応プログラム：「人口減少社会における包摂と継承―最先端秋田からの提言」の委託を受け、2019 ～ 2020年にかけて実施した研究成果の一部である。調査にご協力頂いた秋田青年会議所、上亀之丁竿燈会、国際教養大学竿燈会をはじめ、種々のご教示いただいたジョン・モック氏、小林和代氏、須田幸子氏、調査に参加して頂いたキリアコス・アナスタシウ氏および成澤徳子氏に御礼申し上げたい。

なお、個人を対象とした調査を実施するにあたって、国際教養大学の研究倫理審査委員会の承諾を得たことを明記する。調査結果の一部を本論文に掲載する際には、個人情報保護に最大限配慮したが、もし論文の内容に誤りがあれば筆者らの責任に帰せられることは言うまでもない。

注

1）秋田青年会議所は、公益社団法人日本青年会議所の東北ブロックに所属する団体である。20歳から40歳までと大学生と近い年代のメンバーから構成される。

2）青井智「竿燈まつりでこころとこころのコミュニケーション」『AKITA JC NEWS』, 2005年8月30日（http://www.akitajc.jp/jcnews/jenews05-08.pdf, 2021年1月30日閲覧）

3）正規生とは、学士の学位取得を目的として、基本的に4年間在籍する学生を意味する。この中には同じ条件の正規留学生も含まれるが、国際教養大学竿燈会の場合、正規留学生がメンバーになった事例はいくつかの学年に限られ、そのほかに大学院生のケースもあるという。

4）交換留学生とは、春・秋の各学期に国際教養大学に所属する、外国の提携校からの留学生のことである。竿燈会の主な活動期間は竿燈まつりが行われる夏であるが、季節を問わず1年間の間に正会員として在籍した交換留学生の数を質問している。秋以降も竿燈会としての活動自体はあるため、夏の竿燈まつりに参加しない交換留学生が含まれる場合もある。

5）アナスタシウ氏は学部生の時(2014 ～ 2015年)に交換留学生として来日し、国際教養大学竿燈会に所属していた。その後に大学院生として再び来日し、竿燈会に所属することとなった。

引用文献

根岸　洋・上野祐衣・熊谷嘉隆, 2020,「『秋田の竿灯』と外部参加者に関する基礎的検討」『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』第11号, 国際教養大学アジア地域研究連携機構, 頁111 ～ 120

著 者 略 歴

相沢陽子（秋田経済研究所・研究員）
学士(英米文学、青山学院大学)。1996年より現職。

阿部邦子（国際教養大学国際教養学部・准教授）
パリ・インターナショナルスクールIB講師、フランス文化省文化遺産総局:歴史的建造物部門・ルーブル美術館等の特別研究技術員を経て、2010年国際教養大学着任。2018年4月より同大学アジア研究地域連携機構・准教授を兼任。エコール・デュ・ルーヴル卒。フランス国立大学教員研究員資格(歴史2009年)。博士(美術史学、パリ第四大学ソルボンヌ校)

北畑有紀乃
国際教養大学国際教養学部学生。

熊谷星
国際教養大学国際教養学部学生。

名越健郎（国際教養大学アジア地域研究連携機構・特任教授）
時事通信社入社、モスクワ、ワシントン等の各支局、外信部長を歴任。2012年より拓殖大学教授、本学東アジア調査研究センター特任教授。博士(拓殖大学大学院安全保障研究科)。

根岸洋（国際教養大学アジア地域研究連携機構副機構長・准教授）
日本学術振興会特別研究員DC、青森県教育庁文化財保護課を経て2014年9月より現職。国際考古遺産管理委員会委員、縄文遺跡群世界遺産登録推薦書ワーキング委員(2016年度〜)等歴任。博士(文学、東京大学大学院)。

村山 めい子（英国レディング大学ヘンリービジネススクール講師）
国際基督教大学を経て渡英し観光学を修める。観光を活用した都市経済再生の論文でサリー大学から博士号を取得。日本大学、ロンドンのグリニッジ大学、ウェストミンスター大学で助教授として観光論を教え現在に至る。

［紀要編集委員会］

編集委員長　根岸　洋（国際教養大学アジア地域研究連携機構副機構長・准教授）
豊田　哲也（国際教養大学アジア地域研究連携機構長・教授）
米田　裕之（国際教養大学アジア地域研究連携機構事務局長）

国際教養大学
アジア地域研究連携機構研究紀要　第 12 号

令和 3 年 3 月 31 日発行

編集・発行　国際教養大学アジア地域研究連携機構
秋田市雄和椿川字奥椿岱 193－2
電話　018－886－5844
印刷　秋田活版印刷株式会社